

茨城県教育財団文化財調査報告第90集

一般県道谷田部藤代線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

日 枝 西 遺 跡

上 岩 崎 南 遺 跡

平 成 6 年 3 月

茨 城 県  
財 団 法 人 茨 城 県 教 育 財 団

茨城県教育財団文化財調査報告第90集

一般県道谷田部藤代線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

ひ えだ にし 遺 跡  
日 枝 西  
かみ いわ さき みなみ 遺 跡  
上 岩 崎 南

平成 6 年 3 月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団

# 序

茨城県は、21世紀の到来を見越して、長期的な展望のもとに県土の基盤整備を行っております。県南地域におきましては、「つくば」の新たな展開と国際性豊かな自立都市圏の形成をめざし、広域的な連携を深める交通体系の整備に努めております。

県道谷田部藤代線道路改良工事は、この整備事業に伴い計画されたもので、その予定地内には、埋蔵文化財の包蔵地である日枝西遺跡、上岩崎南遺跡が確認されておりました。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び、平成4年4月から6月にかけて県道谷田部藤代線道路改良工事地内に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。

本書は、日枝西・上岩崎南両遺跡の調査成果を収録したものであり本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会、莖崎町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成6年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 磯田 勇

# 例 言

1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成4年4月から同年6月まで実施した、茨城県稲敷郡茎崎町に所在する日枝西遺跡、上岩崎南遺跡の発掘調査報告書である。

なお、2遺跡の所在地は次の通りである。

日枝西遺跡 稲敷郡茎崎町大字上岩崎字日枝西1,151-1番地ほか

上岩崎南遺跡 稲敷郡茎崎町大字上岩崎字新田前283番地ほか

2 日枝西遺跡、上岩崎南遺跡の調査及び整理に関する教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～
副 理 事 長	角 田 芳 夫	平成3年7月～
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～
常 務 理 事	本 田 三 郎	平成3年4月～平成5年3月
事 務 局 長	藤 枝 宣 一	平成4年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長	石 井 毅	平成2年4月～平成5年3月
	安 藏 幸 重	平成5年4月～
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫 平成4年4月～（平成2年4月～平成4年3月企画管理課長代理）
	主 任 調 査 員	根 本 康 弘 平成3年4月～平成5年3月
	主 任 調 査 員	川 井 正 一 平成5年4月～
	主 事	杉 山 秀 一 平成4年4月～
経 理 課	課 長	藤 田 和 行 平成4年4月～平成5年3月
	課 長	小 幡 弘 明 平成5年4月～
	課 長 代 理	鈴 木 三 郎 平成5年4月～
	主 任	飯 島 康 司 平成4年4月～（平成3年4月～平成4年3月企画管理課）
	主 事	大 貫 吉 成 平成4年4月～平成5年3月（平成2年4月～平成4年3月企画管理課）
主 事	軍 司 浩 作 平成5年4月～	
調 査 課	課長（部長兼務）	石 井 毅 平成元年4月～平成5年3月
	課長（部長兼務）	安 藏 幸 重 平成5年4月～
	調査第二班長	和 田 雄 次 平成4年4月～平成5年3月
	主 任 調 査 員	小 松 崎 猛 彦 平成4年4月～平成4年6月調査
	主 任 調 査 員	中 村 敬 治 平成4年4月～平成4年6月調査
整 理 課	課 長	沼 田 文 夫 平成2年4月～平成5年3月
	課 長	阿 久 津 久 平成5年4月～
	主 任 調 査 員	中 村 敬 治 平成5年度整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第1章第3節3「遺構及び遺物の記載方法」の項を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、縄文式土器については、茨城県立歴史館主任研究員の齊藤弘道氏に御指導をいただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 6 遺跡の概要

遺 跡 名	日枝西遺跡・上岩崎南遺跡				
フリガナ	ヒエダニシイセキ・カミイワサキミナミイセキ				
副 題	一般県道谷田部藤代線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書				
シ リ ー ズ	茨城県教育財団文化財調査報告第90集				
著 者	中 村 敬 治				
編 集 機 関	財団法人 茨城県教育財団				
発 行 機 関	財団法人 茨城県教育財団				
住 所	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				
発 行 日	1994（平成6）年3月31日				
所 収 遺 跡	市 町 村	コ ー ド	北 緯	東 経	標 高
日枝西遺跡	茎崎町	08445-	35°58'25"	140°05'00"	22m
上岩崎南遺跡	茎崎町	08445-	35°58'15"	140°05'01"	21m
所 収 遺 跡	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	
日枝西遺跡	縄文時代中期	竪穴住居跡3軒 地点貝塚2か所		土器（加曾利E式），石器品 土製品（陽物土製品）	
上岩崎南遺跡	中・近世	溝1条			

# 目 次

序

例 言

第1章 調査経緯 .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査経過 .....	1
第3節 調査方法と遺構・遺物の記載方法 .....	2
1 地区設定 .....	2
2 基本層序の検討 .....	3
3 遺構・遺物の記載方法 .....	4
第2章 位置と環境 .....	5
第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	5
第3章 日枝西遺跡 .....	10
第1節 遺跡の概要 .....	10
第2節 遺構と遺物 .....	10
1 竪穴住居跡 .....	10
2 土坑 .....	33
3 溝 .....	40
4 地点貝塚 .....	41
5 遺構外出土遺物 .....	44
第3節 まとめ .....	45
第4章 上岩崎南遺跡 .....	46
第1節 遺跡の概要 .....	46
第2節 遺構と遺物 .....	46
1 溝 .....	46
2 遺構外出土遺物 .....	49
第3節 まとめ .....	50

## 挿 図 目 次

第1図 調査区呼称方法概念図 …………… 2	第16図 第3号住居跡出土遺物実測・ 拓影図(3) ……………26	
第2図 日枝西遺跡土層柱状図 …………… 3	第17図 第3号住居跡出土遺物拓影図(4) ……27	
第3図 上岩崎南遺跡土層柱状図 …………… 3	第18図 第3号住居跡出土遺物拓影図(5) ……28	
第4図 周辺遺跡分布図 …………… 8	第19図 土坑実測図(1) ……………36	
第5図 日枝西・上岩崎南遺跡地形図 …… 9	第20図 土坑実測図(2) ……………37	
<b>日枝西遺跡</b>		
第6図 日枝西遺跡全体図 ……………11～12	第21図 土坑実測図(3) ……………38	
第7図 第1号住居跡実測・遺物出土 位置図 ……………13	第22図 土坑実測図(4) ……………39	
第8図 第1号住居跡出土遺物実測図(1) ……15	第23図 第1号溝実測図 ……………40	
第9図 第1号住居跡出土遺物拓影図(2) ……16	第24図 第1号地点貝塚実測図 ……………41	
第10図 第2号住居跡実測・遺物出土 位置図 ……………19	第25図 第1号地点貝塚出土ヤマトシジミ 殻長・殻高分布図 ……………42	
第11図 第2号住居跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………20	第26図 第2号地点貝塚実測図 ……………43	
第12図 第3号住居跡実測図 ……………22	第27図 遺構外出土遺物実測・拓影図 ……44	
第13図 第3号住居跡遺物出土位置図 ……23	<b>上岩崎南遺跡</b>	
第14図 第3号住居跡出土遺物実測図(1) ……24	第28図 上岩崎南遺跡地形図 ……………47	
第15図 第3号住居跡出土遺物実測図(2) ……25	第29図 第1号溝実測図 ……………48	
	第30図 遺構外出土遺物実測図・拓影図 ……49	

## 表 目 次

表1 日枝西遺跡・上岩崎南遺跡周辺遺跡 一覧表 …………… 7	表3 日枝西遺跡土坑一覧表 ……………35
表2 日枝西遺跡竪穴住居跡一覧表 ……32	表4 第1号地点貝塚出土ヤマトシジミ 重量一覧表 ……………42

# 写真目次

## 日枝西遺跡

- PL 1 遺跡全景，調査前全景，  
遺構確認状況，調査終了後全景
- PL 2 第1号住居跡，第1号住居跡土層  
断面，第1号住居跡遺物出土状況，  
第1号地点貝塚出土状況
- PL 3 第2号住居跡，第2号住居跡遺物出  
土状況，第3号住居跡，第3号住居  
跡遺物出土状況
- PL 4 第3号住居跡遺物出土状況，第2号  
地点貝塚出土状況
- PL 5 第1～7・10～12号土坑
- PL 6 第14～17・20・26・27・29・30  
号土坑
- PL 7 第34～38・40・41・43～45・48・  
55号土坑

- PL 8 第1～3号住居跡出土遺物
- PL 9 第3号住居跡出土遺物
- PL 10 第3号住居跡出土遺物，第1号住  
居跡出土土器片錘
- PL 11 第1～3号住居跡出土土器片錘
- PL 12 第3号住居跡出土土器片錘
- PL 13 第1～3号住居跡出土縄文式土器片
- PL 14 第2号住居跡・遺構外出土土製品，  
第1・3号住居跡・遺構外出土石器・  
石製品

## 上岩崎南遺跡

- PL 15 遺跡全景，調査前全景，  
グリッド試掘，第1号溝土層断面，  
第1号溝，遺構外出土遺物



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

一般県道谷田部藤代線は、国道357号の分岐点である、つくば市大字谷田部地内を起点として、稲敷郡荃崎町を横断し国道6号との分岐点である、北相馬郡藤代町大字藤代地内に至る、総延長14.26kmの稲敷地方の主要な道路である。

茨城県は、県南地域の広域的な連携を深める交通体系の整備を推進しており、この整備事業の一環として、稲敷郡荃崎町上岩崎地区の、クランク状線形の改良と幅員の確保を目的とした、一般県道谷田部藤代線道路改良工事(幅員8.5m、総延長1.38km)を計画した。

工事に先立ち、平成3年9月10日に茨城県は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し、茨城県教育委員会は、平成3年10月22日に現地踏査を、平成4年1月初旬に試掘調査を実施し、工事予定地内に日枝西遺跡、上岩崎南遺跡の存在を確認した。茨城県教育委員会は、文化財保護の立場から、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、現状保存が困難であるとし、記録保存の措置を講ずることとなり、平成4年1月10日に調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し、平成4年4月1日から、日枝西遺跡、上岩崎南遺跡の調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

日枝西遺跡、上岩崎南遺跡の発掘調査は、平成4年4月1日から平成4年6月30日までの3か月にわたって実施された。以下、調査の経過について、その概要を記述する。

4月前半 発掘調査に必要な事務所や現場倉庫の設置、調査器材搬入及び作業員の雇用を行った。

4月後半 20日には、発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って、鍬入れ式を挙行了。上岩崎南遺跡の清掃作業を行い、調査区内にグリッドを設定し、試掘を開始した。23日には、4分の1までの試掘を完了したが、調査区南部の一部に遺構が確認されたに過ぎなかった。そのため遺構の存在が確認された周辺を拡張するという方法を採用し、人力による表土除去と遺構確認を併せて行った。その結果、溝1条が確認され、遺構調査を開始した。

5月前半 日枝西遺跡においては、グリッド試掘の結果調査区のほぼ全域から遺構が確認され

たため、重機による表土除去を計画した。8日には併行していた上岩崎南遺跡の遺構調査を終え、11日には日枝西遺跡の南部から表土除去と、併せて遺構確認作業を開始した。その結果、竪穴住居跡3軒、土坑30基、溝1条、地点貝塚1か所が確認された。

5月後半 15日から日枝西遺跡の遺構調査を調査区中央部の第1号住居跡から開始した。第1号及び第3号住居跡内からは、地点貝塚が確認された。特に第1号住居跡内の地点貝塚は、広範囲のため50cmメッシュを組み、貝を取り上げた。貝種は、ヤマトンジミのみであり、他の貝種は含まれていなかった。

6月前半 第1号及び第3号住居跡からは、多量の縄文式土器片（縄文時代中期加曾利E式期）が出土した。第3号住居跡の下層から有孔鏝付土器片が出土した。

6月後半 20日に、日枝西遺跡において現地説明会を開催し、遺構・遺物を一般公開した。24日には、日枝西遺跡、上岩崎南遺跡の航空写真を撮影した。29日までに、日枝西遺跡、上岩崎南遺跡の補足調査、埋め戻し及び安全対策を実施し、30日には、一切の現地調査を完了した。

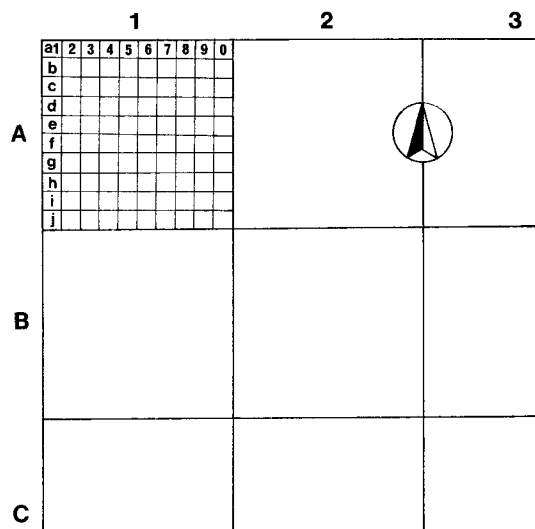
### 第3節 調査方法と遺構・遺物の記載方法

#### 1 地区設定

日枝西遺跡、上岩崎南遺跡の発掘調査を実施するに当たり、遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸（南北）・Y軸（東西）を基準点として、40m方眼を設定し、この40m四方の区画を大調査区(大グリッド)とした。さらに、この大調査区を東西、南北に各々十等分して、4m四方の小調査区(小グリッド)を設定した。

調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず、大調査区の名称は、北から南へ「A」・「B」…、西から東へ「1」・「2」…とし、その組み合わせで「A1区」、「B2区」…のように呼称した。さらに、大調査区を4m方眼に100分割した小調査区をそれぞれ同様に、北から南へ



第1図 調査区の呼称方法概念図

「a」・「b」…「j」，西から東へ「1」・「2」…「9」・「0」と小文字を付した。各小調査区の名前は，大調査区の名称と合わせて，「A1a<sub>1</sub>」区・「B2b<sub>2</sub>」区のように呼称した。

なお，基準点の杭打ち測量は，財団法人茨城県建設技術公社に委託し実施した。

両遺跡における基準点の座標は，次のとおりである。

- (1) 日枝西遺跡 (D2a<sub>1</sub>) X軸(南北)−2,760m, Y軸(東西)+24,200m
- (2) 上岩崎南遺跡 (B1a<sub>0</sub>) X軸(南北)−3,200m, Y軸(東西)+24,036m

## 2 基本層序の検討

### (1) 日枝西遺跡

日枝西遺跡においては，調査区中央部C1g<sub>0</sub>区にテストピットを設定し，第2図に示すような土層の堆積状況を確認した。

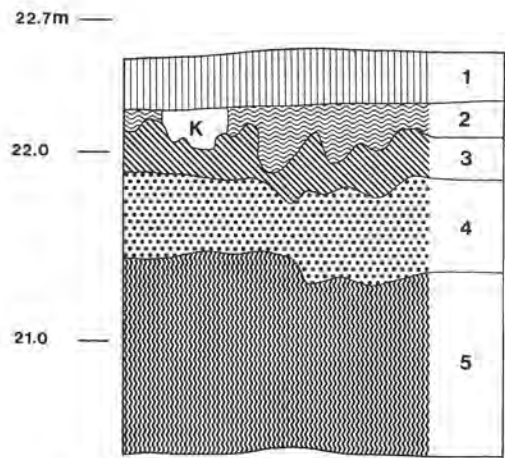
第1層は黒褐色の耕作土であり，厚さは25～30cmである。第2層は褐色のソフトローム層への漸移層であり，厚さは20～30cmである。第3層は褐色のソフトローム層であり，ローム粒子が多量に混入しており，厚さは15～35cmである。耕作によると思われる攪乱がこの層まで達している。第4層はにぶい褐色のハードローム層への漸移層であり，厚さは30～60cmである。第5層は明褐色のハードローム層であり，粘性・しまりとも強く，厚さは75～105cmである。

日枝西遺跡の遺構は，表土下40～50cm程の第2層上面から確認されている。

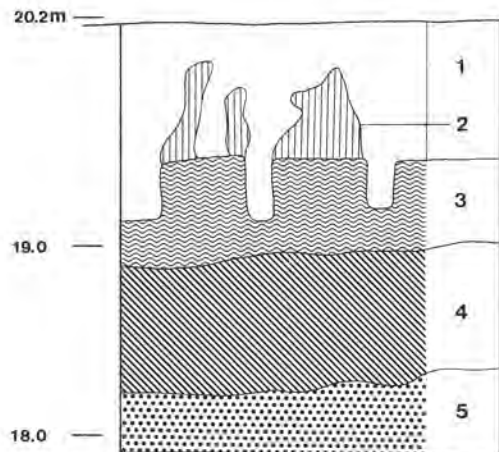
### (2) 上岩崎南遺跡

上岩崎南遺跡においては，調査区南部B1c<sub>0</sub>区にテストピットを設定し，第3図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は黒褐色の耕作土であり，厚さは20～70cmである。第2層は褐色の耕作土からソ



第2図 日枝西遺跡土層柱状図



第3図 上岩崎南遺跡土層柱状図

フトローム層へ漸移層である。ローム粒子，ローム小ブロックが混在し，耕作による攪乱が多く，厚さは35～50cmである。第3層は明褐色のソフトローム層からハードローム層への漸移層であり，厚さは45～55cmである。第4層は明褐色のハードローム層であり，厚さは65～70cmである。第5層は明褐色のハードローム層から粘土層への漸移層になっており，厚さは30～40cmである。

上岩崎南遺跡の遺構は，表土下30～40cm程の第2層上面から確認されている。

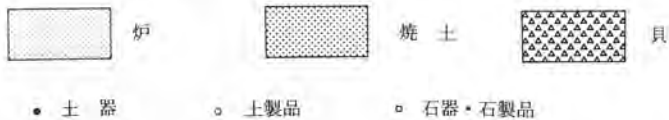
### 3 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構及び遺物の記載方法は，以下のとおりである。

#### (1) 使用記号

遺構						遺物			
名称	住居跡	土坑	溝	ピット	地点貝塚	土器	土製品	石器	古銭
記号	S I	SK	SD	P・・・	SM	P	DP	Q	M

#### (2) 遺構及び遺物の実測図中の表示



#### (3) 土層の分類

土層観察における色相の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社）を使用した。

#### (4) 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法

- ① 日枝西遺跡の遺跡全体図は縮尺500分の1，第1・3号住居跡は縮尺80分の1，第2号住居跡・土坑・溝は縮尺60分の1にした。上岩崎南遺跡の遺跡全体図は縮尺900分の1，第1号溝は縮尺80分の1にした。
- ② 遺物は原則として4分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては，個々にS=1/6等と表示した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

日枝西遺跡、上岩崎南遺跡の2遺跡は、茨城県稲敷郡茎崎町上岩崎に所在している。

茎崎町は、県の南部、稲敷郡の最西端に位置し、東に牛久市、西に筑波郡伊奈町、南は牛久沼を隔てて龍ヶ崎市、北は筑波研究学園都市のつくば市に接している。村域は東西約4km、南北約7km、面積約27.88km<sup>2</sup>を測り、人口は26,118人、世帯数は7,385戸(平成5年4月1日現在)を擁している。町の東側を国道6号とJR常磐線が平行して南北に通じ、北側を国道408号線が、西側には常磐自動車道が開通している。

茎崎町の地形は、標高25~28mの洪積台地である稲敷台地と、平行してほぼ南北に流れる4河川水系の沖積低地とからなっている。東端を小野川が南流して霞ヶ浦に注ぎ、中央部を稲荷川、谷田川が、西端を西谷田川が南流し、それぞれ牛久沼に注いでいる。

稲敷台地は、筑波台地の南延長部にあたり、台地の東端は東村阿波崎付近にある。台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり、下部から上部にかけて、成田層下部、成田層上部、龍ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層の順で堆積し、堆積状況は、水平で単調であり、褶曲や断層はみられない。

日枝西遺跡は、茎崎町西部の上岩崎地区にあり、西谷田川に向かって突出した標高18~22mの舌状台地の中央部に位置している。調査前の現況は、畑地として利用されており、西側の水田面との比高は約15mである。

上岩崎南遺跡は、日枝西遺跡と同一の台地上で、400m程南西側に位置している。調査前の現況は、畑地として利用されている。

### 第2節 歴史的環境

牛久沼の低湿地と丘陵性の稲敷台地上に町域を形成している茎崎町には、『茨城県遺跡地図』<sup>(1)</sup>によれば、数多くの遺跡が分布している。特に、豊富な水資源と多種多様な動植物に恵まれた自然環境を背景に、牛久沼周辺の台地上には各時代にわたる人々の生活跡が認められる。

ここでは、町内とその周辺の主な遺跡について、時代を追って概観することにする。

旧石器時代の遺跡は、今までのところ未確認であるが、大井古墳群<sup>(3)</sup>〈40〉から彫器が1点、小山台貝塚<sup>(4)</sup>〈7〉から剝片1点が出土している。

縄文時代の遺跡は、牛久沼の西岸と北岸に多く認められる<sup>(2)</sup>。西岸には、庄兵衛新田遺跡〈23〉

ノ切遺跡〈22〉，館山貝塚〈2〉，千泥貝塚〈18〉，上岩崎貝塚〈5〉，小山台貝塚がある。北岸の台地上には，天宝喜西遺跡〈25〉，孝学院遺跡〈26〉，高見原遺跡〈27〉，高見原A遺跡〈28〉，小莖北遺跡〈29〉，小莖貝塚〈15〉がある。早期の遺跡は，小莖北遺跡（早・中期），中山鹿島遺跡〈24〉（早・前期），孝学院遺跡（早・前期），館山貝塚（早期～晩期）がある。前期の遺跡は，ノ切遺跡，高見原番外遺跡〈35〉，天宝喜貝塚〈14〉（前・中期），天宝喜C遺跡〈33〉（前・中・後期），小山台貝塚（前・中・後・晩期）があり，小山台貝塚からは浮島式の土器片が出土している。中期の遺跡は，上岩崎貝塚（中・後・晩期），小莖貝塚（中・後・晩期），庄兵衛新田遺跡，小山台貝塚がある。中でも代表的な遺跡は，昭和49年に発掘調査が実施された小山台貝塚であり，今回調査を実施した日枝西遺跡〈45〉の北西へ0.5km程離れた，下岩崎の西谷田川に面する標高20m程の舌状台地上に位置している。小山台貝塚からは，縄文時代の竪穴住居跡34軒が確認され，人骨33個体，鹿・猪の骨，貝殻，硬玉製大珠，土偶，独鈷石，石棒，石刀，石剣類，その他身体装身具が，縄文時代前期の浮島式から晩期の安行式に至るまでの土器とともに出土している。中期の遺構は，竪穴住居跡31軒，土坑30基が確認され，遺物は，勝坂式から阿玉台式，加曾利E式期のものが出土している。特に，加曾利E式期の遺構・遺物が多く，この時期が集落の最盛期であったことが認められる。西谷田川を挟んで小山台貝塚の南西約2kmには，同様の遺物を出土している伊奈町神生貝塚〈41〉がある。後・晩期の遺跡は，館山貝塚，上岩崎貝塚，小莖貝塚，小山台貝塚がある。前述の小山台貝塚からは，竪穴住居跡3軒（後期2軒，晩期1軒），土坑76基が確認され，遺物は，称名寺式・堀之内式・加曾利B式期の土器とともに土偶等も出土している。また，安行式期の遺物も出土している。

弥生時代の遺跡は，九万坪遺跡〈20〉，小莖南遺跡〈30〉，下大井遺跡〈34〉があり，竪穴住居跡や弥生式土器が確認されている。

古墳時代の遺跡は，前期の遺跡として泊崎城跡〈17〉<sup>(6)</sup>がある。弥生時代後期から古墳時代前期への過渡期に構築されたと思われる方形周溝墓からは，底部穿孔された丹塗りの壺が出土している。小野川右岸の大井地区の五十塚古墳群〈11〉には，前方後円墳2基，円墳11基がある。牛久沼沿岸の台地上には，下岩崎古墳群〈3〉，稲荷様古墳〈4〉，宮本古墳群〈10〉，郷中塚古墳群〈12〉，稲荷山古墳群〈16〉がある。特に，小莖の稲荷山古墳群からは，埴輪や直刀が出土している。

奈良・平安時代の遺跡は，未確認であるが，律令制下において当町域は，常陸国河内郡に属し，「和名抄」に見える河内郷に比定される<sup>(7)</sup>。

中世の遺跡は，岡見氏の城砦の一つとされる高崎城跡〈13〉や，牛久沼に突き出た泊崎に所在する泊崎城跡があり，土塁・堀等が確認されている。その他，館山館〈1〉，小山城跡〈6〉，九万坪館跡〈20〉，御城跡〈9〉等が確認されている。

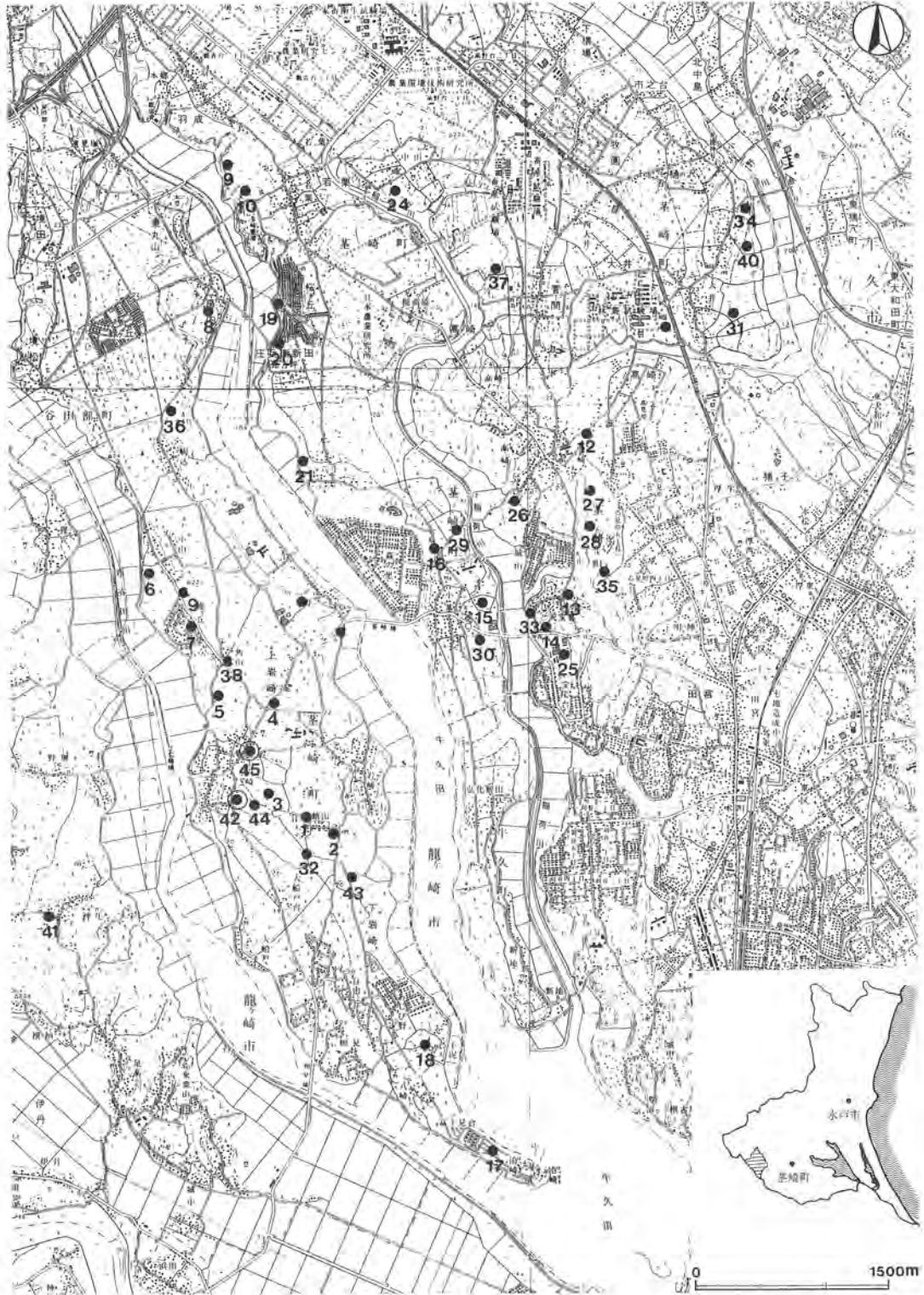
※遺跡名の次の〈 〉内の数字は，表1・第1図の該当番号と同じである。

注・参考文献

- (1) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年
- (2) 茎崎町教育委員会 『茎崎村史』 1973年
- (3) 大井古墳群発掘調査団 『大井古墳群発掘調査概要』 1975年
- (4) 小山台発掘調査団 『小山台貝塚』 1976年
- (5) 茎崎町教育委員会 『下岩崎古墳群第1号墳発掘報告書(甚兵衛塚)』 1990年
- (6) 茎崎町教育委員会 『泊崎城跡』 1980年
- (7) 角川書店 『日本地名大辞典 8 茨城県』 1983年

表1 日枝西遺跡・上岩崎南遺跡周辺遺跡一覧表

番号	名称	時代					県遺跡番号	番号	名称	時代					県遺跡番号	
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良以降				旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良以降		
1	館山館					○	1713	24	中山鹿島遺跡						○	2801
2	館山貝塚		○				1714	25	天寶喜西遺跡						○	2802
3	下岩崎古墳群				○		1715	26	孝学院遺跡						○	2803
4	稲荷様古墳群				○		1716	27	高見原遺跡						○	2804
5	上岩崎貝塚		○				1717	28	高見原A遺跡						○	2805
6	小山城跡					○	1718	29	小茎北遺跡						○	2806
7	小山台貝塚	○	○				1719	30	小茎南遺跡						○	2807
8	房内貝塚		○				1720	31	大井遺跡						○	2808
9	御城跡					○	1721	32	館山西遺跡						○	2809
10	宮本古墳群				○		1722	33	天寶喜C遺跡						○	2810
11	五十塚古墳群				○			34	下大井遺跡					○		2811
12	郷中塚古墳群				○		1724	35	高見原番外遺跡					○		2812
13	高崎城跡					○	1725	36	駒込遺跡						○	2813
14	天寶喜貝塚		○					37	管間遺跡						○	2814
15	小茎貝塚		○				1727	38	三角山貝塚						○	5728
16	稲荷山古墳群				○		1728	39	小山台遺跡						○	5729
17	泊崎城跡				○	○	1729	40	大井古墳群	○				○		
18	千泥貝塚		○				1730	41	神生貝塚						○	
19	九万坪遺跡				○		2796	42	上岩崎南遺跡					(当遺跡)	○	5732
20	九万坪館跡					○	2797	43	館山東遺跡					○		5733
21	六斗遺跡		○				2798	44	甚兵衛塚						○	
22	ノ切遺跡		○				2799	45	日枝西遺跡					(当遺跡)		
23	庄兵衛新田遺跡		○				2800									



第4図 周辺遺跡分布図





第5図 日枝西・上岩崎南遺跡地形図

# 第3章 日枝西遺跡

## 第1節 遺跡の概要

日枝西遺跡は、稲敷郡荊崎町の西部（上岩崎地区）、西谷田川左岸の標高18～22mの台地上に立地する、縄文時代中期の遺跡である。現況は畑で、今回の調査区域は、南北に約180m、最大幅東西に約15m、面積2,714m<sup>2</sup>である。昭和49年に小山台貝塚調査団によって調査された小山台貝塚は、当遺跡の北西約0.5kmに所在している。

今回の調査によって確認された遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡3軒、住居跡内地点貝塚2か所、及び時期不明の土坑38基、溝1条である。

縄文時代中期の竪穴住居跡は、調査区中央部から北部にかけて3軒確認されており、平面形は円形ないし楕円形である。規模は、径4～8m程と様々であるが、いずれの住居跡も中心部に地床炉を有しており、6・7本の支柱穴が確認されている。

また、第1・第3号住居跡からは、地点貝塚（ヤマトンジミ主体）が確認されている。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に20箱程出土している。遺物の大部分は、縄文時代中期（加曾利E式期）の深鉢や浅鉢、土器片錘などで、住居跡の覆土及び床面から出土している。第2号住居跡からは陽物土製品が、第3号住居跡からは有孔鏝付土器片が出土している。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

当遺跡からは、縄文時代中期の竪穴住居跡が3軒確認されている。これらの住居跡は、調査区の北部に確認され、重複もなく遺構の遺存状態も比較的良好である。遺物は、主に加曾利E式の深鉢形土器の破片が出土している。以下、確認された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載する。第1・3号住居跡内の地点貝塚については、別項に記載する。

#### 第1号住居跡（第7図）

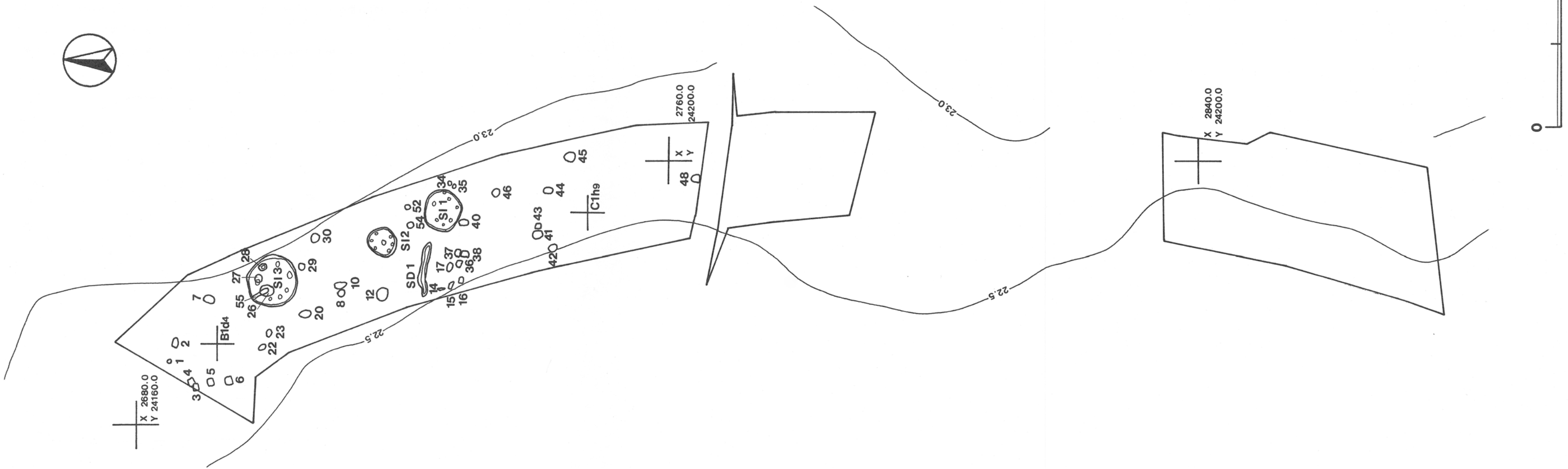
位置 C1b<sub>9</sub>区

規模と平面形 長軸6.25m、短軸5.57mの楕円形。

長軸方向 N-79°-W

壁 壁高は、20～30cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、全体に踏み固められている。

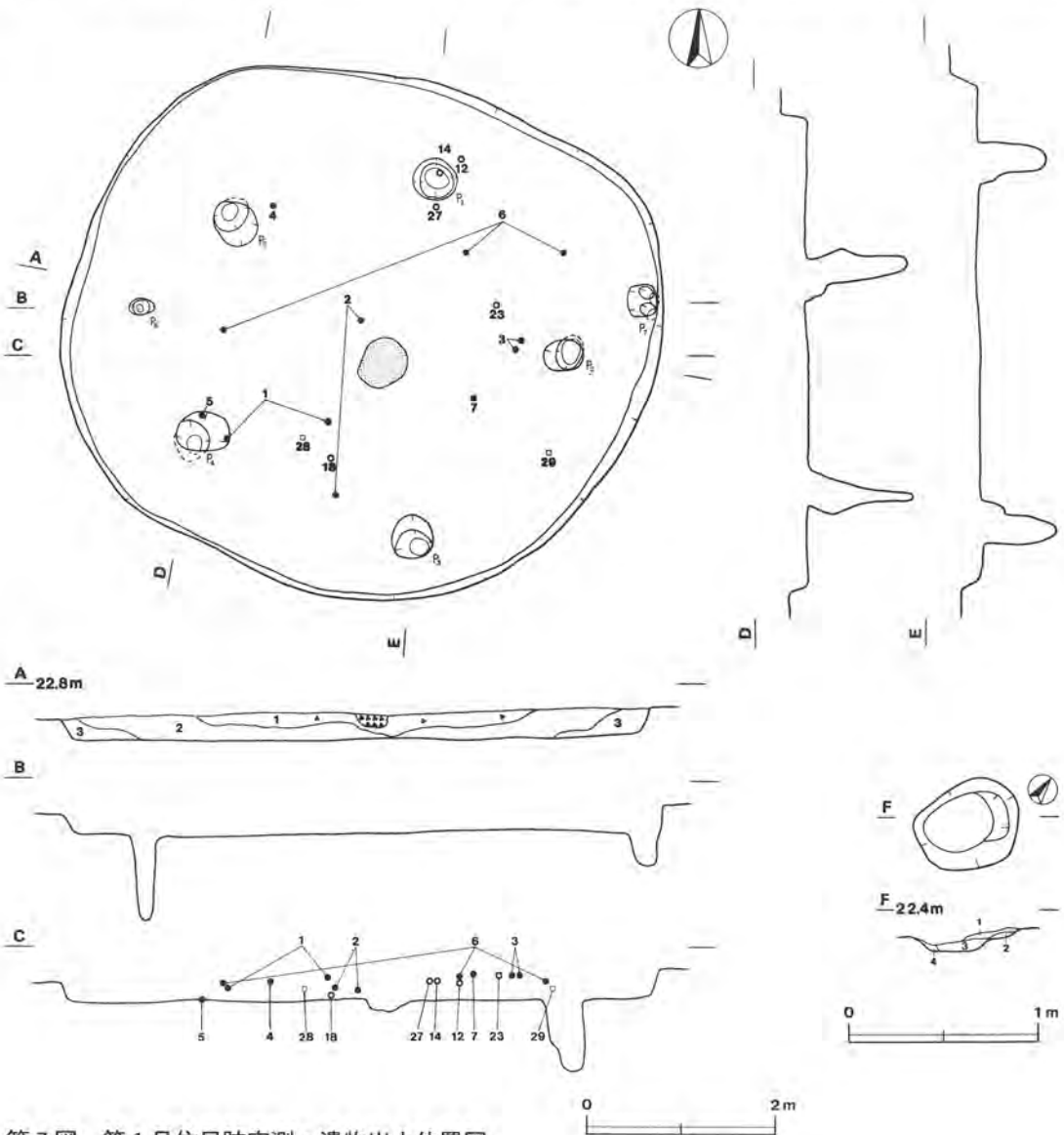


第6図 日枝西遺跡全体図

ピット 7か所。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は長径26～51cm，短径18～42cmの円形で，深さは72～113cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。P<sub>7</sub>は長径12～15cm，短径10cmの円形で，深さは83～89cmである。東壁際にあり，規模や配置から補助柱穴と考えられる。

炉 長軸線上の中心部，住居跡のほぼ中央部に付設されている。径70cm程の円形で，床を10cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は4層からなり，1層はローム粒子・焼土粒子・貝を少量含む黄褐色，2層は焼土粒子を少量含む暗褐色土，3層は焼土粒子を多量に含むにぶい赤褐色土，4層は焼土粒子を中量含む暗褐色土である。

覆土 3層からなる。1層はヤマトシジミを多量に含む混貝土層，2層はローム粒子，ローム大



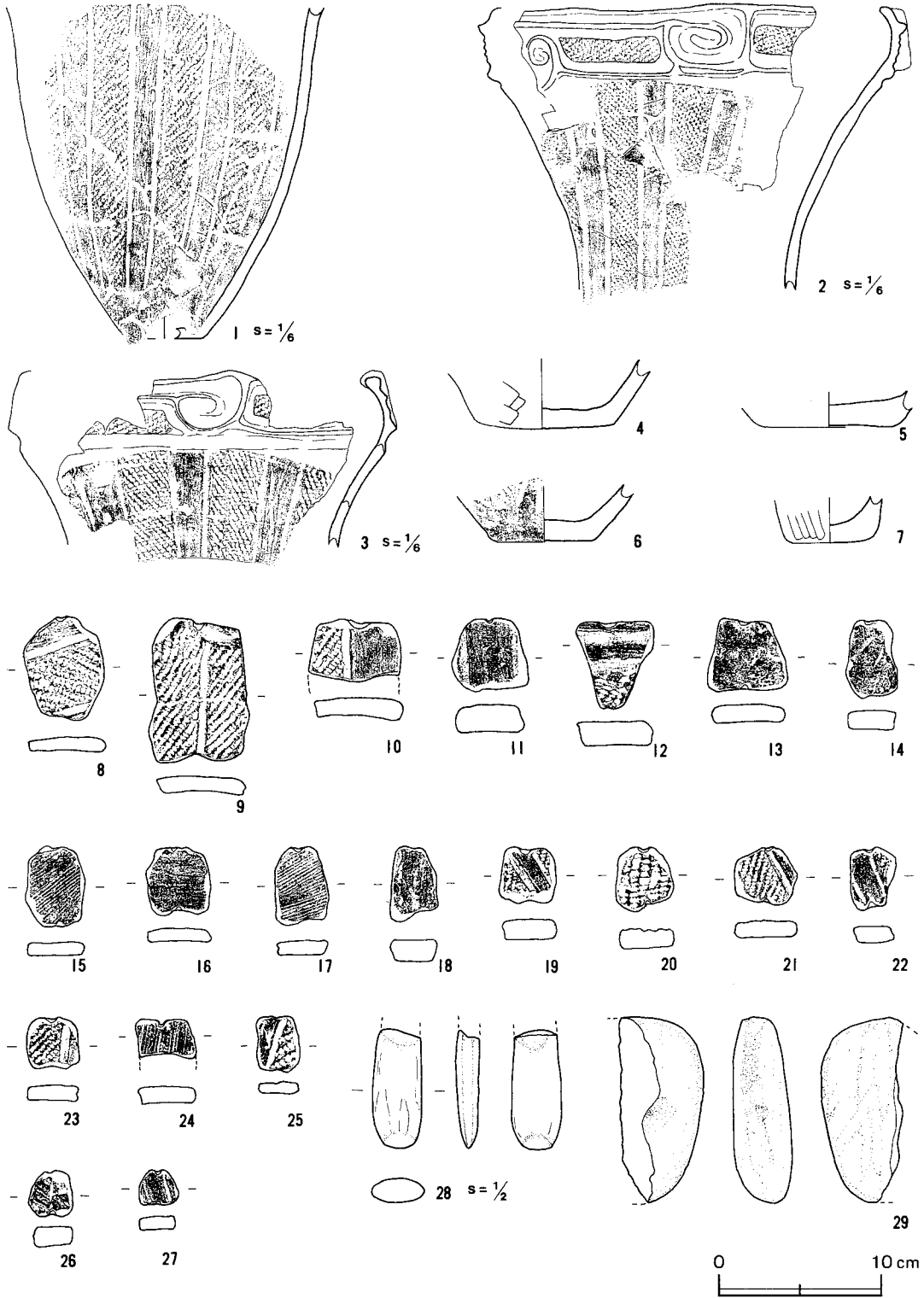
第7図 第1号住居跡実測・遺物出土位置図

ブロックを含む明褐色土で、縄文式土器片の大半が出土している。3層はローム粒子を多量に含む、にぶい褐色土である。

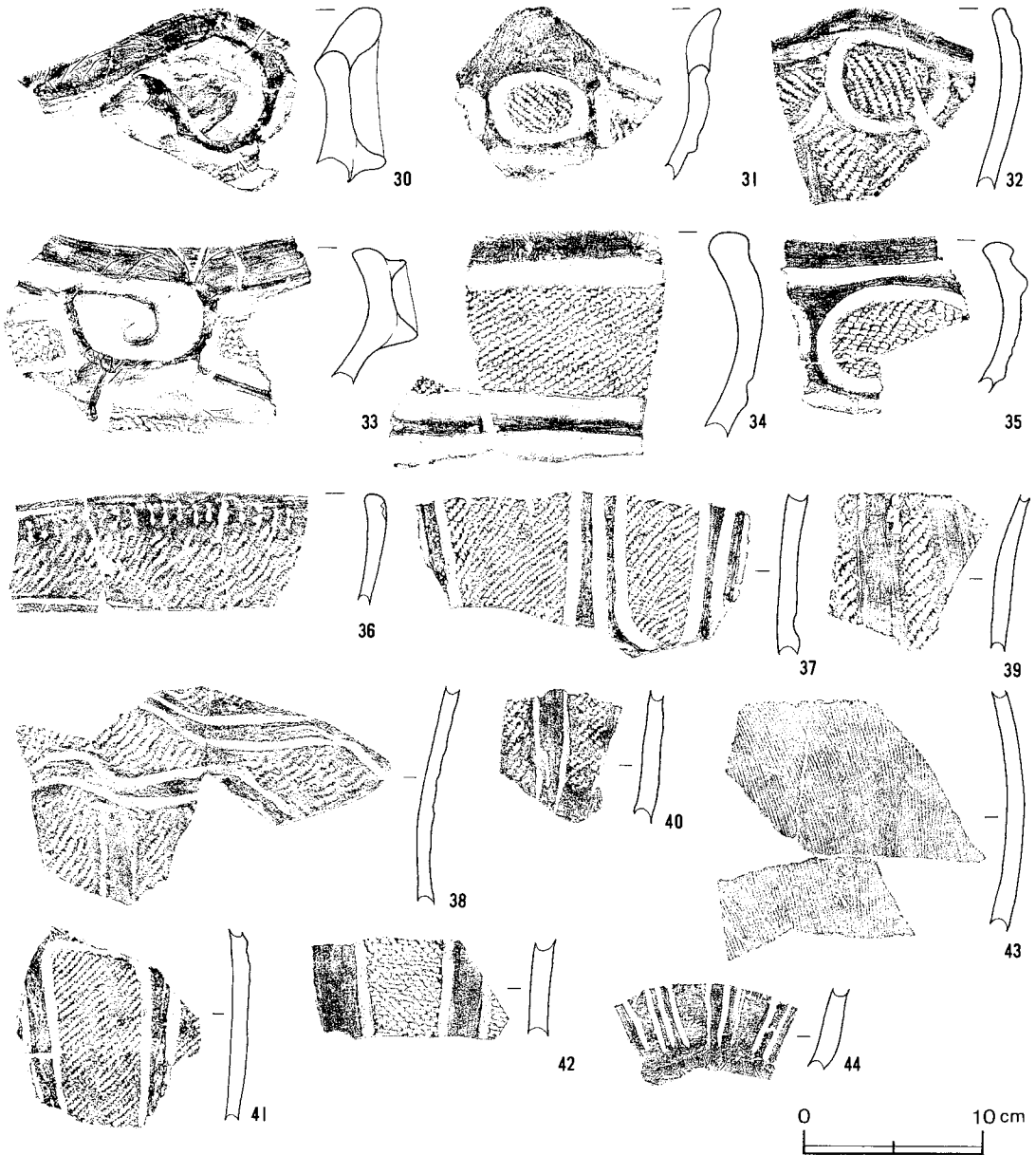
**遺物** 住居跡の覆土中から、住居廃絶後に投棄されたとされる多量の縄文式土器片と、ヤマトシジミ（総重量約120kg）が出土している。第8図1の深鉢は炉の南西側覆土中層から、2の深鉢は炉の西側覆土中層から、3の深鉢はP<sub>2</sub>西側の覆土上層から、28のノミ状磨製石斧は炉の南西側覆土中層から、29の磨石はP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>間覆土中層から、それぞれ出土している。また、土器片錘20点（8～27）が覆土中から出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物等から縄文時代中期後葉（加曾利E III式期）の住居跡と考えられる。覆土中からは、住居の廃絶後に投棄されたものと思われるヤマトシジミの地点貝塚が確認されている。

第9図30～44は、第1号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。30～36は口縁部片である。30～32は波状口縁で、30の波状部には渦巻文が施されている。31・32は楕円形文で区画され、区画内には単節縄文RLが横位回転で施文されている。33は太い隆帯による渦巻文が施され、へら状工具による丁寧なミガキが施されている。34は平行した2本の太い沈線が巡らされ、沈線間には複節縄文LR Lが縦位回転で施文されている。35は楕円形文で区画され、区画内には単節縄文RLが横位回転で施文されている。36は上位に先端二股状の棒状工具による刺突文が巡らされ、刺突文の下位には単節縄文RLが横位回転で施文されている。37～44は胴部片である。37は3条の沈線で区画した磨消帯を垂下させ、38は2条の沈線で区画した磨消帯を、波状に施したり、垂下させている。共に地文には単節縄文RLが縦位回転で施文されている。39は単節縄文LR Lが縦位回転で施文され、幅広の磨消帯を垂下させている。40・41は単節縄文RLが縦位回転で、42は複節縄文LR Lが縦位回転で施文され、それぞれ2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。43は縦位の櫛歯状条線文が施されている。44は底部にかけての破片であり、3条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。



第8図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第9図 第1号住居跡出土遺物拓影図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第8図 1	深鉢 縄文式土器	B ( 3.2) C [ 6.8]	胴部片。胴部は単節縄文LRが縦位回転で施文され、2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。胴下端部は無文帯となっている。内面は縦位のナデが施されている。	砂粒、礫 赤褐色 普通	P1 40% 炉南西側 覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
2	深鉢 縄文式土器	A [38.0] B (27.5)	口縁部から胴部に至る破片。口縁部には隆帯による渦巻文とナゾリを加えた隆線による横位の楕円文が巡らされ、楕円文内は複節縄文LRLが横位回転で施文されている。胴部は複節縄文LRLが縦位回転で施文され、2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒、スコリア 橙色 普通	P 2 30% 炉西側 覆土中層
3	深鉢 縄文式土器	A [34.0] B (16.8)	口縁部から胴部に至る破片。波状口縁で、口縁部には隆帯による渦巻文が施されている。渦巻文の左右の楕円文には単節縄文LRが横位回転で施文されている。胴部は単節縄文LRが縦位回転で施文され、2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 3 20% P <sub>2</sub> 西側 覆土上層
4	深鉢 縄文式土器	B (4.4) C 8.3	胴下端部から底部へ至る破片。平底。胴下端部は無文帯であり、内・外面共横位のナデが施されている。	砂粒、スコリア にぶい橙色 普通	P 4 5% P <sub>2</sub> 東側 覆土上層
5	深鉢 縄文式土器	B (2.2) C 8.0	底部片。平底。底部の内・外面共ヘラ状工具によるミガキが施されている。	砂粒、スコリア にぶい赤褐色 普通	P 5 5% P <sub>2</sub> 部 覆土下層
6	深鉢 縄文式土器	B (3.5) C 6.0	胴下端部から底部へ至る破片。平底。胴下端部は無文帯である。底部内・外面はナデが施されている。二次焼成、外面煤付着。	砂粒、長石 にぶい橙色 普通	P 6 5% 炉北側 覆土上層
7	深鉢 縄文式土器	B (2.8) C 5.0	胴下端部から底部へ至る破片。平底。胴下端部は無文帯であり、縦位のナデが施されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒、長石 にぶい橙色 普通	P 7 5% 炉南東側 覆土上層

図版番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第8図8	土器片 鉢	6.5	5.0	1.0	33.5	100	覆土中	DP 1
9	土器片 鉢	9.0	6.4	1.3	85.2	100	炉北側覆土中層	DP 2
10	土器片 鉢	(3.9)	5.8	1.4	(32.7)	一部欠損	覆土中	DP 3
11	土器片 鉢	4.5	4.8	1.8	44.1	100	覆土中	DP 4
12	土器片 鉢	5.5	4.8	1.7	38.3	100	P <sub>2</sub> 部覆土中層	DP 5
13	土器片 鉢	4.5	5.0	1.2	29.7	100	覆土中	DP 6
14	土器片 鉢	4.8	3.3	1.2	24.2	100	P <sub>2</sub> 部覆土中層	DP 7
15	土器片 鉢	5.1	3.7	0.8	21.0	100	覆土中	DP 8
16	土器片 鉢	4.2	4.2	0.9	16.7	100	覆土中	DP 9
17	土器片 鉢	4.7	3.4	0.8	17.1	100	覆土中	DP10
18	土器片 鉢	4.6	2.9	1.4	21.2	100	炉南西側覆土中層	DP11
19	土器片 鉢	3.5	3.6	1.3	21.2	100	覆土中	DP12
20	土器片 鉢	4.1	3.7	1.2	19.5	100	覆土中	DP13
21	土器片 鉢	3.7	4.0	1.0	16.7	100	覆土中	DP14
22	土器片 鉢	4.0	2.9	0.9	12.7	100	覆土中	DP15
23	土器片 鉢	3.2	3.4	1.1	13.7	100	炉北東側覆土上層	DP16
24	土器片 鉢	(2.5)	3.7	1.2	(11.8)	一部欠損	覆土中	DP17
25	土器片 鉢	3.5	2.7	0.7	9.0	100	覆土中	DP18
26	土器片 鉢	2.9	2.8	1.2	11.2	100	覆土中	DP19
27	土器片 鉢	2.2	2.5	0.9	5.5	100	炉北東側覆土上層	DP20



図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第8図28	磨製石斧	(3.7)	1.6	0.8	(7.9)	凝灰岩	炉南西側覆土中層	Q1
29	磨石	11.5	(5.1)	3.5	(269.2)	安山岩	P <sub>2</sub> ・P <sub>3</sub> 間覆土中層	Q2

## 第2号住居跡（第10図）

位置 B1<sub>7</sub>区

規模と平面形 長軸4.53m，短軸4.20mの円形。

長径方向 N-55°-E

壁 壁高は，15～20cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，全体に踏み固められている。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は長径35～41cm，短径25～38cmの円形で，深さは41～50cmである。

壁の内側に沿って配置され，規模や配列から支柱穴と考えられる。

炉 長軸線上の中心部，住居跡のほぼ中央部に付設されている。長径78cm，短径64cmの楕円形で，床を15cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は2層からなり，1層はローム粒子・炭化物・焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土，2層はローム粒子・焼土粒子を少量，焼土中ブロックを中量含むにぶい赤褐色土である。

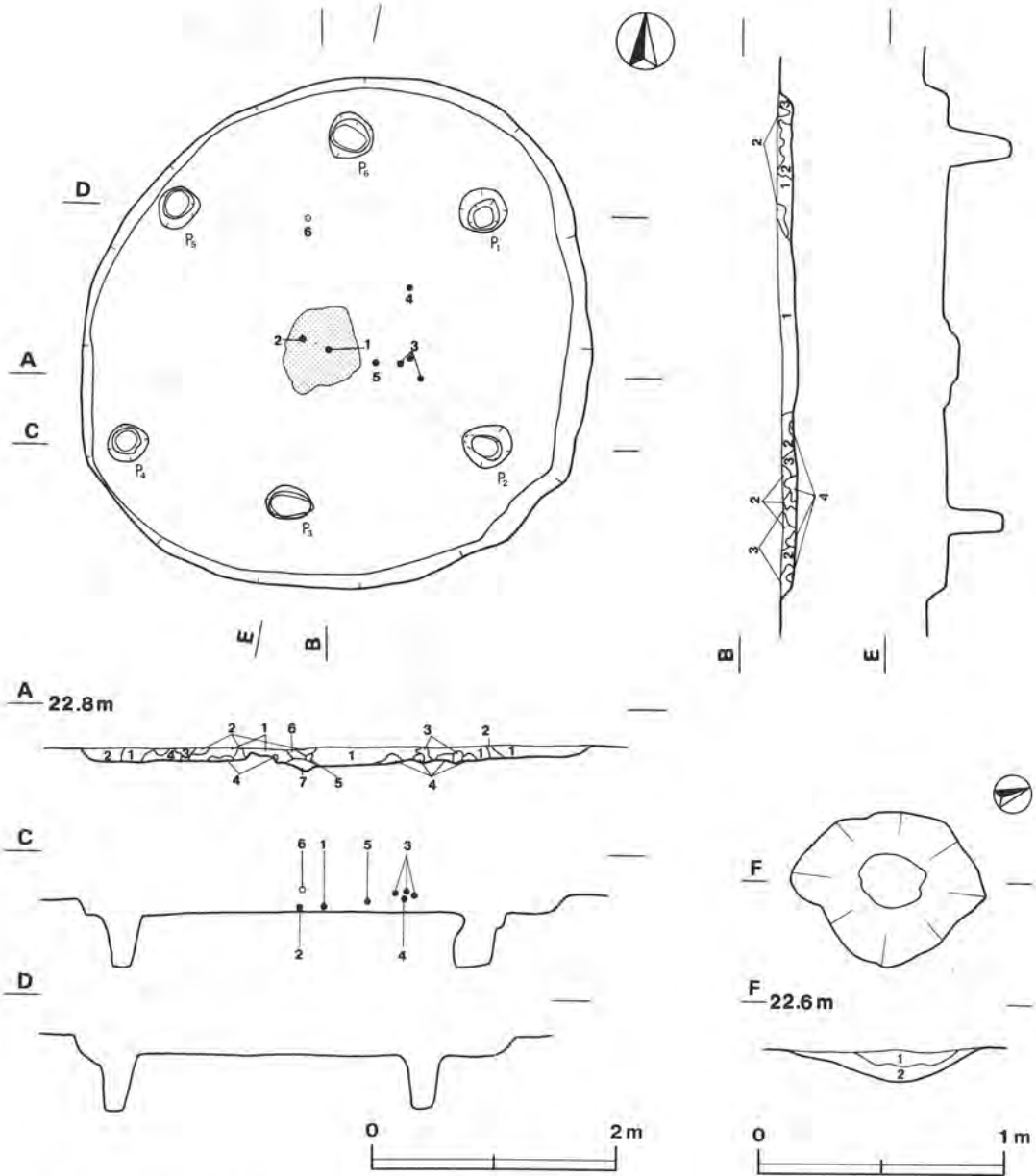
覆土 7層からなる。1層はローム大ブロック多量，炭化物を中量含む褐色土，2層はローム粒子・焼土粒子を少量含む褐色土，3層はローム小ブロック・炭化物を少量含む褐色土，4層はローム大ブロックを多量に含む明褐色土である。遺物の大半は1層から出土している。5～7層は，焼土粒子，炭化物を含む赤褐色ないし明赤褐色土で，炉の上層にあたる。

遺物 住居跡の覆土中及び床面から多量の縄文式土器片が出土している。第11図1の深鉢と2の深鉢は炉床から，3の深鉢は炉とP<sub>2</sub>間の覆土上層から，4の深鉢の底部は炉とP<sub>1</sub>間の覆土上層から，それぞれ出土している。6の陽物土製品は炉の北側覆土上層から出土している。また，土器片錘5点（8～12）が覆土中及び炉内から出土している。

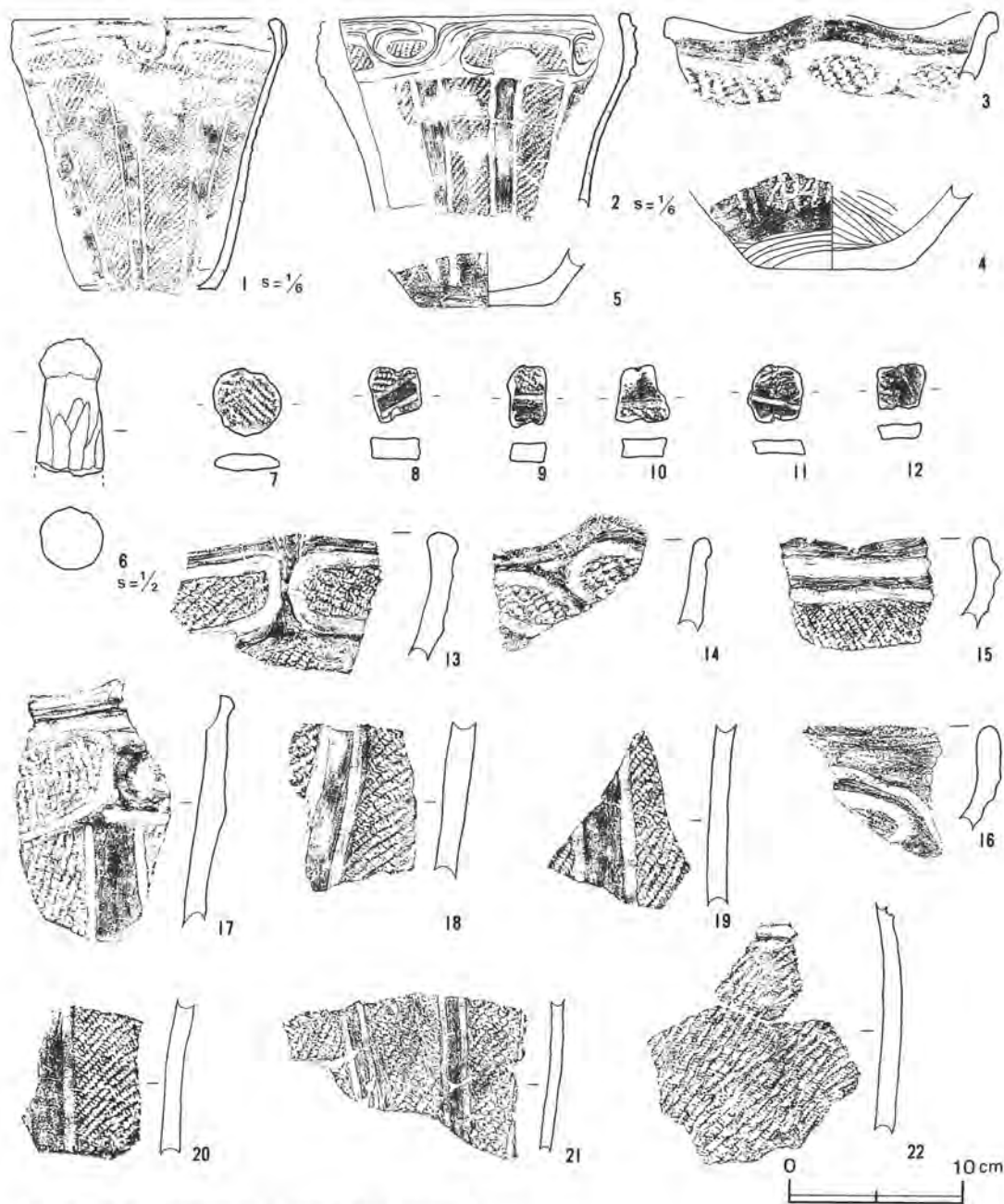
所見 本跡は，3軒の住居跡の中では最小規模で，出土遺物等から縄文時代中期後葉（加曾利E III式期）の住居跡と考えられる。

第11図13～22は，第2号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。13～16は口縁部片である。13・14は波状口縁であり，楕円形文で区画されている。区画内には単節縄文RLが回転方向を変えて施文されている。15は口縁直下に平行した2本の太い沈線が巡らされ，下位に単節縄文RLが回転方向を変えて施文されている。16・17は楕円形文で区画され，区画内には単節縄

文RLが横位回転で施文されている。18~22は胴部片である。18~20は単節縄文RLが縦位回転で、21は単節縄文LRが縦位回転で施文され、それぞれ2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。22は単節縄文RLが縦位回転で施文されている。



第10図 第2号住居跡実測・遺物出土位置図



第11図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	深鉢 縄文式土器	A [23.1] B 23.5 C [11.4]	口縁部から胴部に至る破片。口縁部には沈線区画による横位の楕円形文が巡らされている。区画内は単節縄文RLが横位回転で施文されている。胴部は単節縄文RLが縦位回転で施文され、2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 明赤褐色 普通	P9 40% 炉床
2	深鉢 縄文式土器	A [27.0] B (16.8)	口縁部から胴部に至る破片。口唇部は丸味をもつ。口縁部には隆線区画による横位の楕円形文が巡らされている。区画内は単節縄文RLが横位回転で施文されている。胴部は単節縄文RLが縦位回転で施文され、2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	P10 20% 炉床
3	深鉢 縄文式土器	A [19.1] B (3.9)	口縁部片。波状口縁で、口縁部は沈線により区画されている。区画内は単節縄文LRが横位回転で施文されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P11 5% 炉・P <sub>7</sub> 間 覆土上層
4	深鉢 縄文式土器	B (4.9) C (8.9)	胴下端から底部に至る破片。平底。胴下端部は無文である。胴下端部外面はヘラ状工具による横位のミガキ、内面は縦位のミガキが施されている。	砂粒、細礫 明赤褐色 普通	P12 5% 炉・P <sub>7</sub> 間 覆土上層
5	深鉢 縄文式土器	B (3.2) C 7.9	底部片。平底。底部の内・外面共ヘラ状工具によるナデが施されている。	砂粒、スコリア にぶい橙色 普通	P13 5% 炉東側 覆土中層

図版番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第11図 6	陽物土製品	(3.9)	1.9	1.8	(14.6)	一部欠損	炉北側覆土上層	DP21
7	土製円板	3.9	3.9	1.0	15.7	100	覆土中	DP22
8	土器片 錘	3.2	3.1	1.2	13.7	100	覆土中	DP23
9	土器片 錘	3.6	2.3	1.1	11.6	100	覆土中	DP24
10	土器片 錘	3.4	3.1	1.1	11.8	100	覆土中	DP25
11	土器片 錘	3.3	3.2	0.8	10.0	100	炉内	DP26
12	土器片 錘	2.6	2.8	0.9	7.3	100	覆土中	DP27

第3号住居跡 (第12・13図)

位置 B1f<sub>6</sub>区

重複関係 第26～28・55号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸7.77m, 短軸7.45mの円形。

長軸方向 N-72°-W

壁 壁高は30～45cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

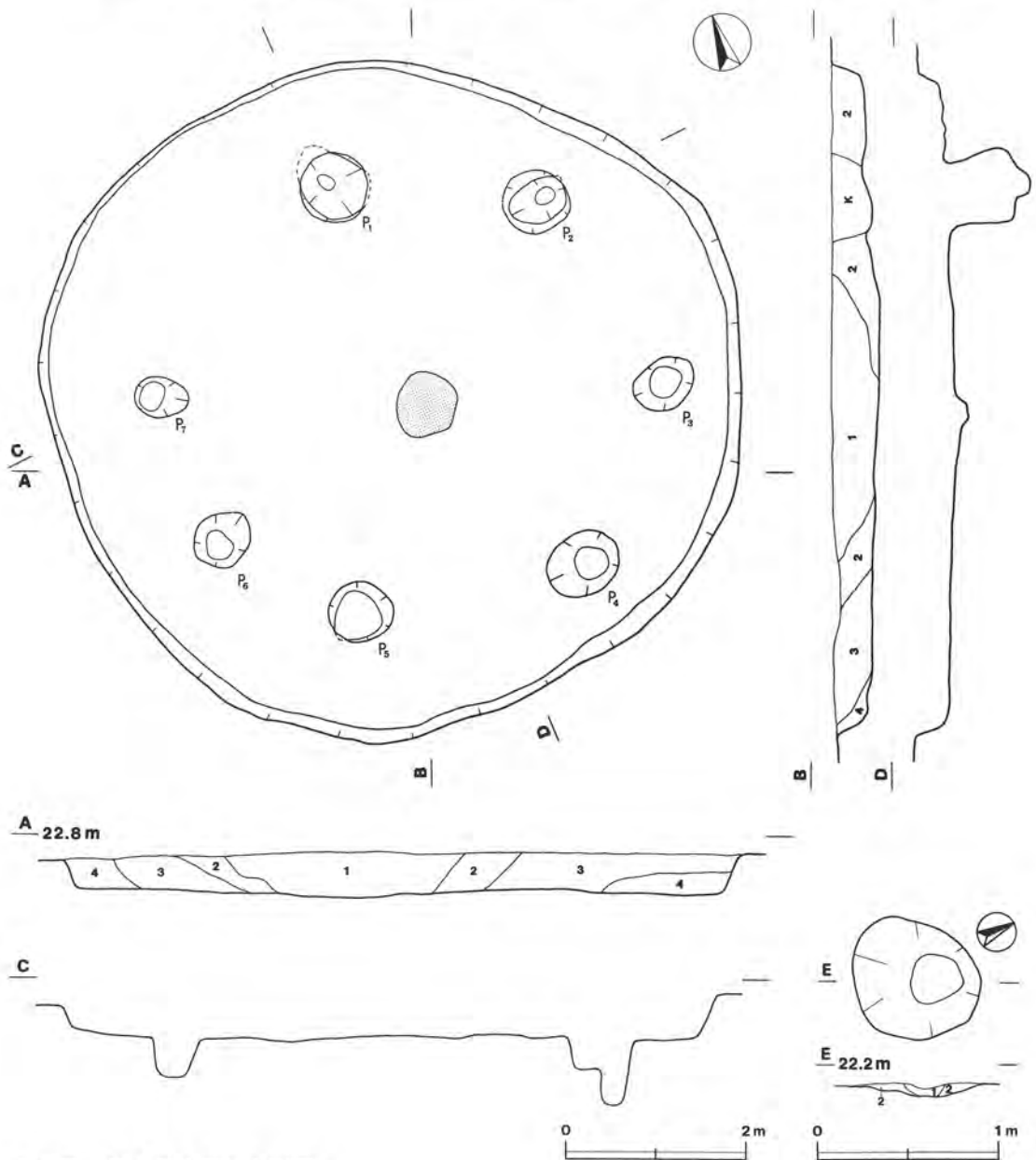
床 平坦で、全体に踏み固められている。

ピット 7か所。P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>は長径56～80cm, 短径45～78cmの円形で、深さは47～89cmである。

壁の内側を沿うように設置され、規模や配列から支柱穴と考えられる。

炉 長軸線上のやや南東寄りに付設されている。長径76cm，短径63cmの楕円形で，床を15cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は2層からなり，1層はローム粒子を中量，焼土粒子・炭化粒子を少量含む褐色土，2層は焼土粒子を少量，炭化粒子を極少量含む暗褐色土である。

覆土 4層からなる。1層はローム粒子多量，焼土粒子・炭化物を少量含む褐色土，2層はローム粒子中量，焼土粒子を少量含むにぶい褐色土，3層はローム粒子を中量，焼土粒子・炭化物を

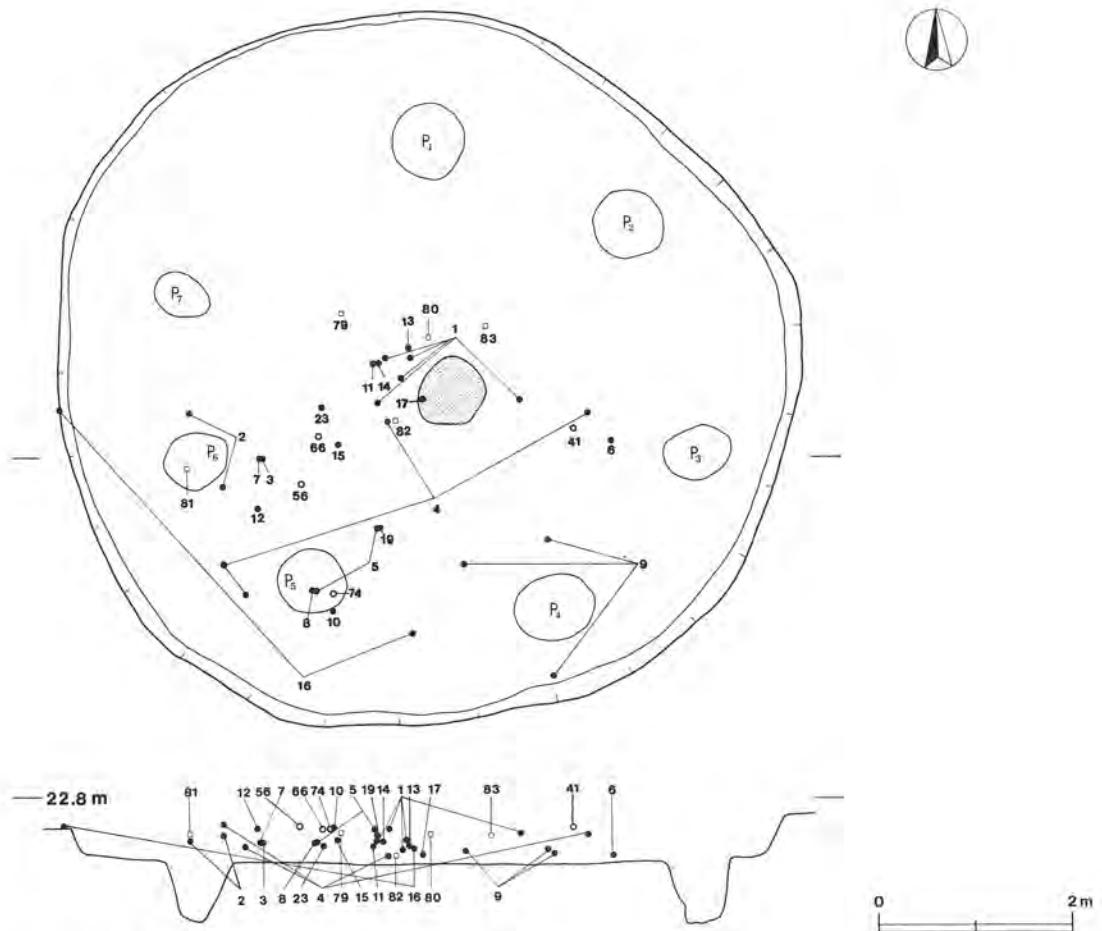


第12図 第3号住居跡実測図

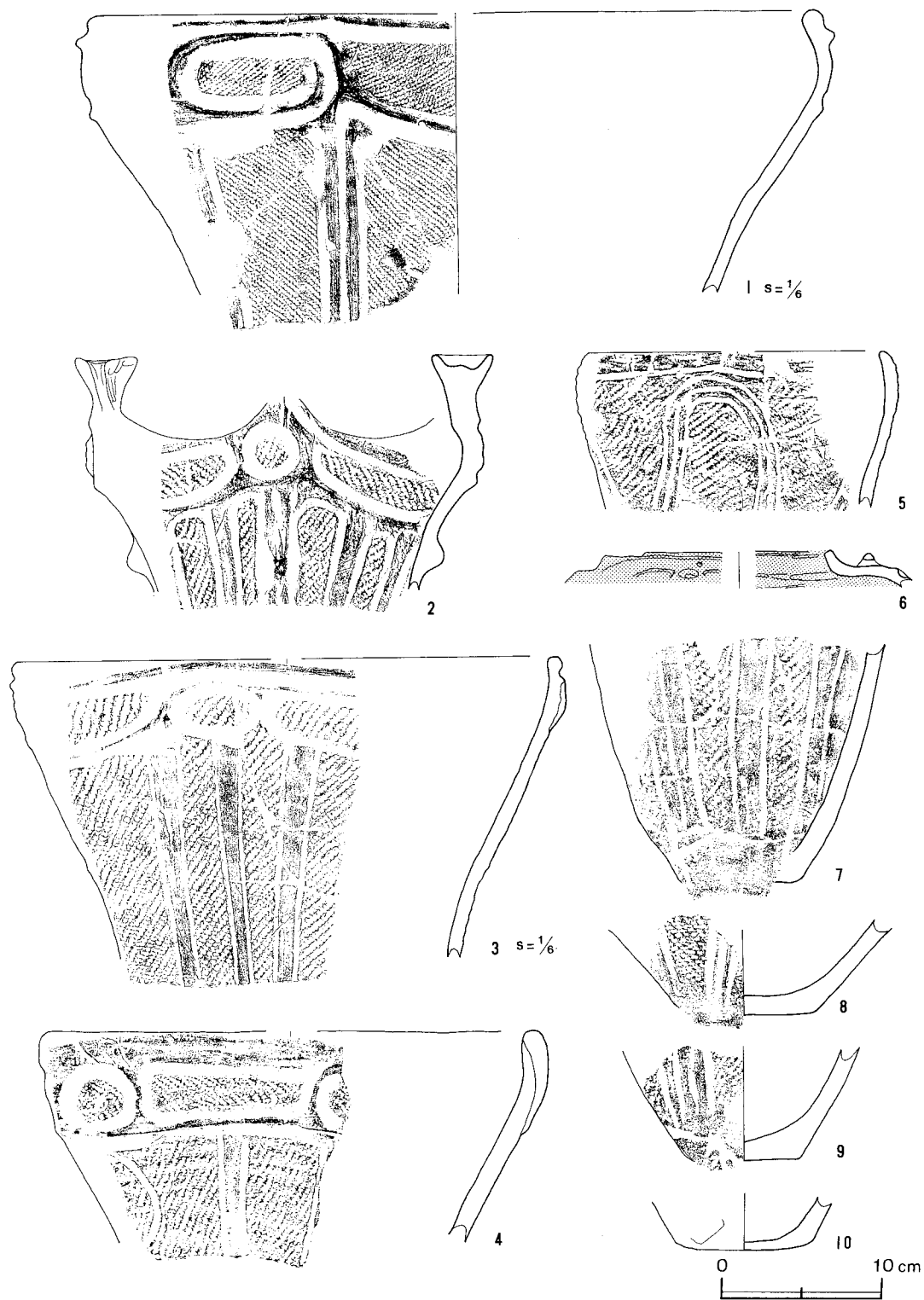
極少量含む褐色土，4層はローム粒子を少量，焼土粒子・炭化物を極少量含む暗褐色土である。縄文式土器片は1層から多量に出土している。

**遺物** 当調査区の3軒の住居跡の中では，最も多量に縄文式土器片が出土している。ヤマトシジミ(総重量36.0kg)が住居跡南西部から出土している。第14図1の深鉢は炉周辺の覆土中層から，2の深鉢はP<sub>6</sub>周辺の覆土上層から，3の深鉢はP<sub>6</sub>東側の覆土中層から，4の深鉢は炉南側の覆土中層から，6の有孔鏝付土器片は炉とP<sub>3</sub>間の覆土下層から，それぞれ出土している。また，土製円板2点(25・26)，土器片錘51点(27~77)と石鏃(78)，凹石(79)，砥石(80)，敲石(81)，有孔軽石(83)が1点ずつ覆土中から，磨石(82)が炉南西側から，それぞれ出土している。

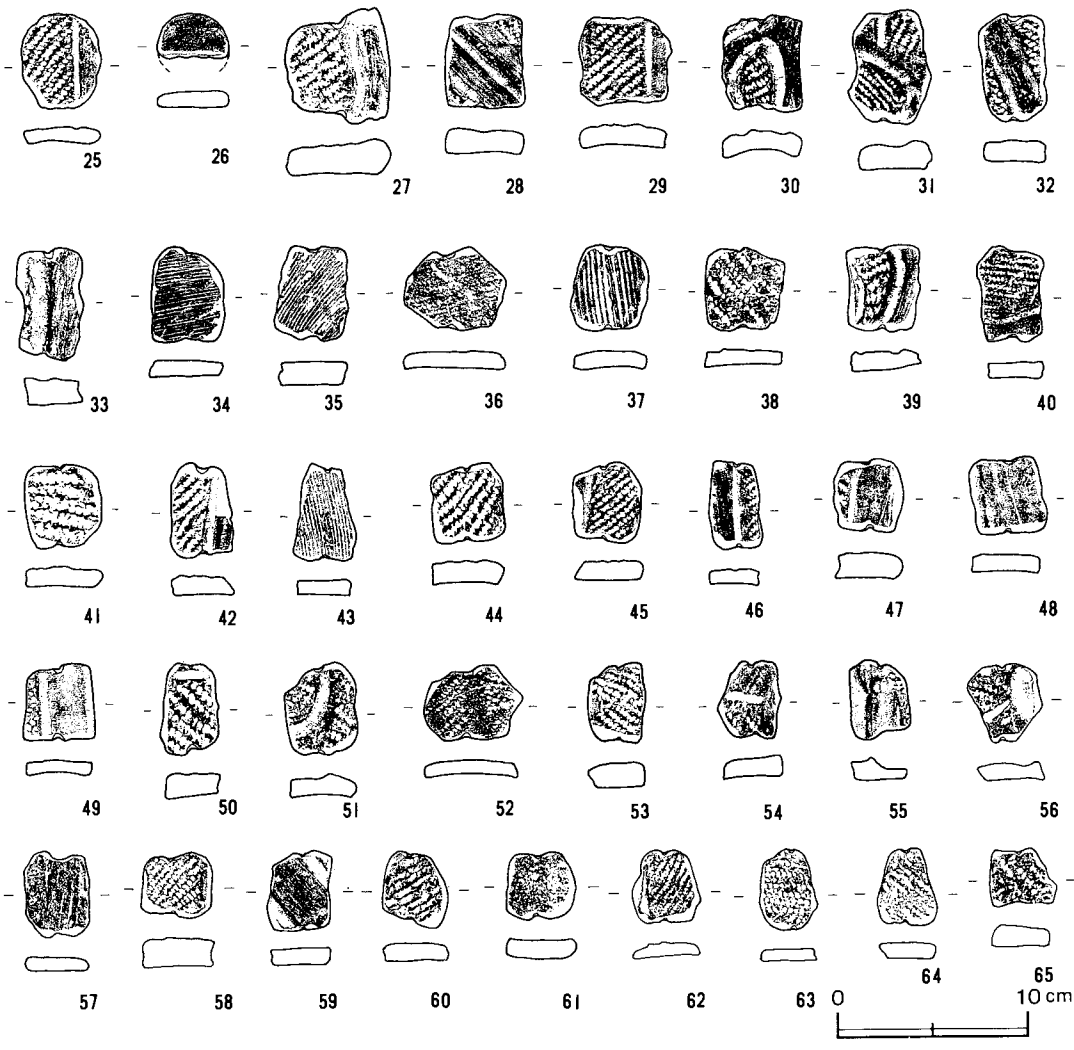
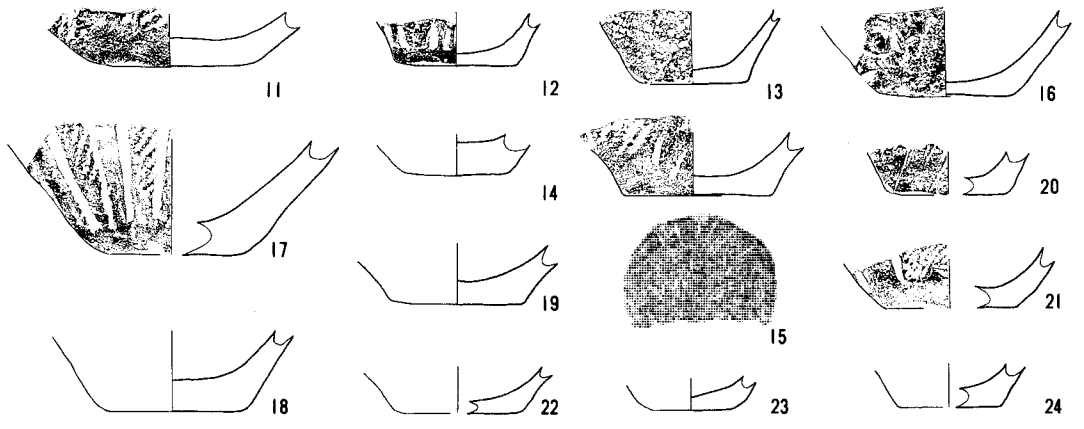
**所見** 本跡は，当調査区の中では最大規模の住居跡で，出土遺物等から縄文時代中期後葉(加曾利E III式期)の住居跡と考えられる。覆土から住居の廃絶後に投棄されたと思われるヤマトシジミの小規模な地点貝塚が確認されている。



第13図 第3号住居跡遺物出土位置図

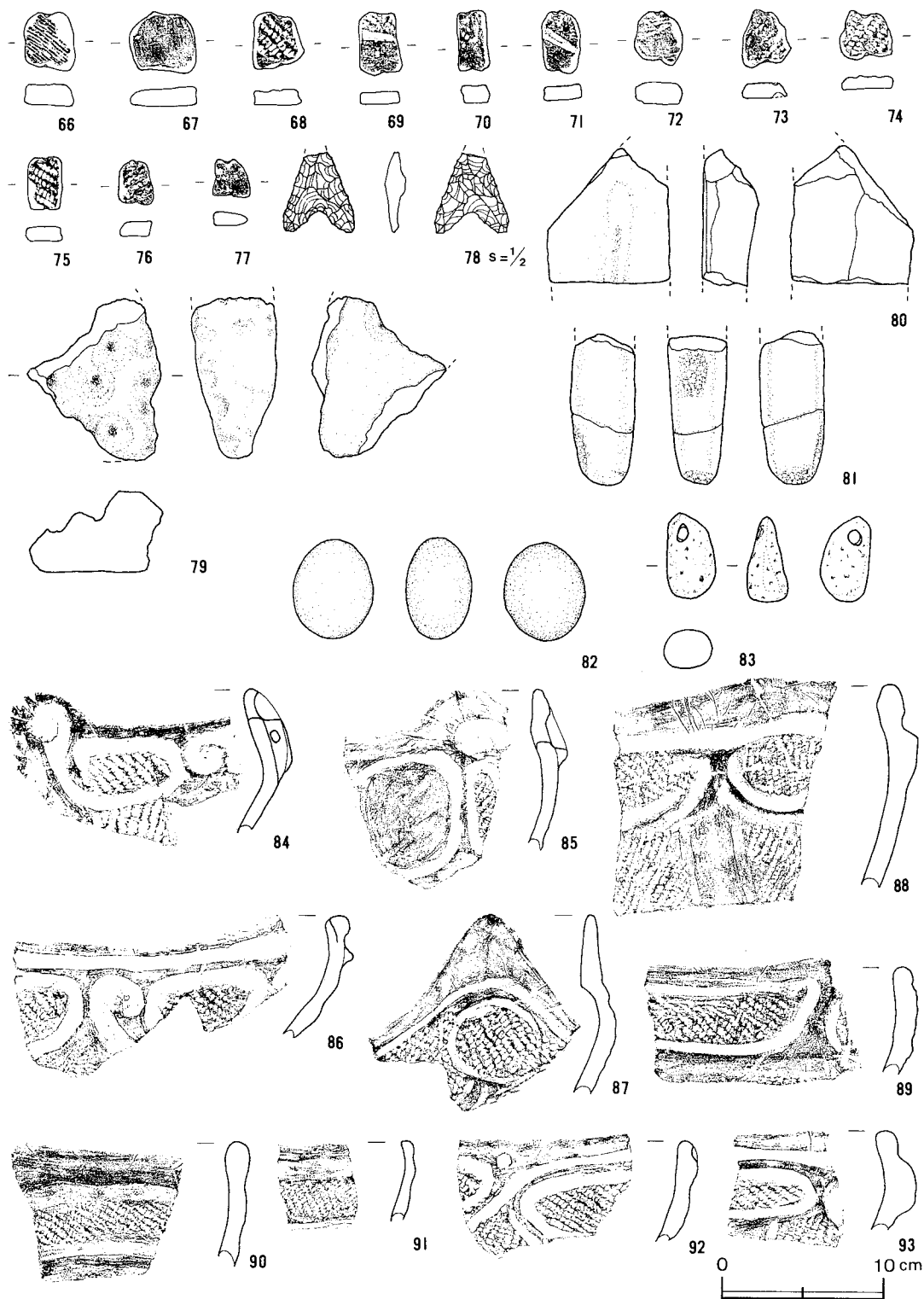


第14图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)

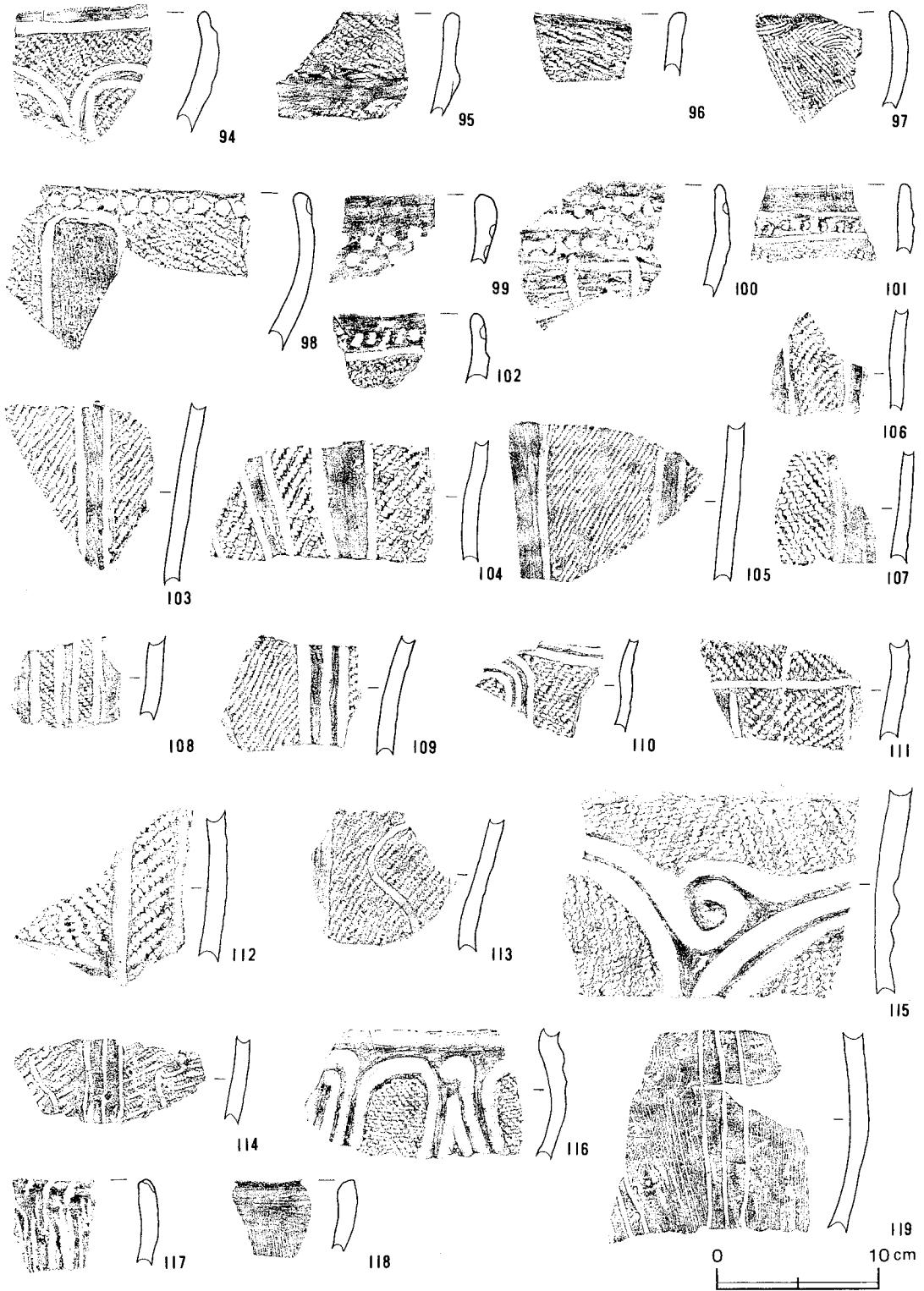


第15图 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

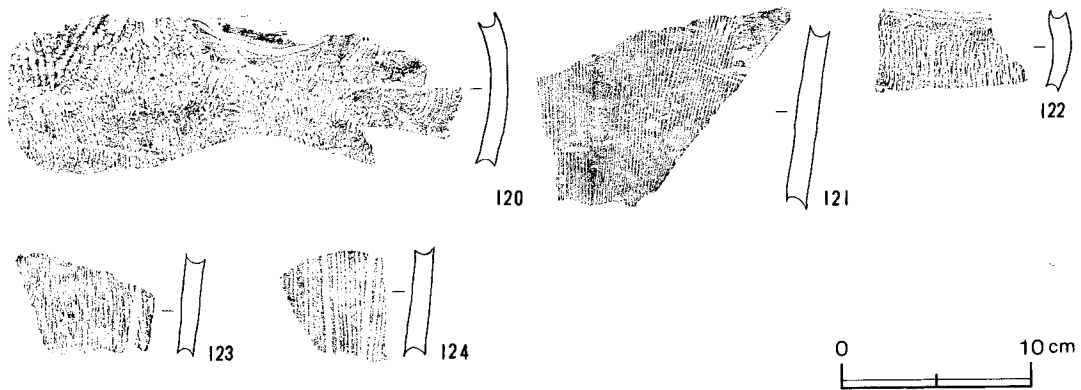




第16图 第3号住居跡出土遺物実測・拓影图(3)



第17图 第3号住居跡出土遺物拓影图(4)



第18図 第3号住居跡出土遺物拓影図(5)

第16図84～第18図124は、第3号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。ここでは、(1)口縁部が波状のもの、(2)口縁部に沈線が巡らされているもの、(3)口縁部まで縄文が施文されているもの、(4)口縁部に連続刺突文が施されているもの、(5)胴部に磨消帯を垂下させているもの、(6)胴部に沈線が施されているもの、(7)口縁部・胴部に櫛歯状条線文が施されているものに分けて記載する。

(1) 口縁部が波状のもの (84～88)

84の波状部には渦巻文が、口縁部には楕円形文と渦巻文が施され、楕円形文内には単節縄文RLが横位回転で施文されている。85の波状部には渦巻文が施され、円形文で区画されている。区画内は無文である。86は口縁直下に太い沈線を巡らし、下位は渦巻文と楕円形文で区画され、区画内は単節縄文RLが横位回転で施文されている。87は円形文で、88・89は楕円形文で区画され、区画内は単節縄文RLが横位回転で施文されている。

(2) 口縁部に沈線が巡らされているもの (90～93)

90・91は平行した2本の太い沈線が巡らされ、沈線間を単節縄文RLが横位回転で施文されている。92・93は沈線と楕円形文で区画され、区画内には単節縄文RLが横位回転で施文されている。94は口縁直下に沈線が巡らされ、2条の沈線で区画した磨消帯が設けられている。

(3) 口縁部まで縄文が施文されているもの (95～97)

95・96は単節縄文RLが横位回転で施文され、97は無節縄文が異方向に施文されている。

(4) 口縁部に連続刺突文が施されているもの (98～102)

98～100は丸頭棒状工具による連続刺突文が、98は1段に、99は2段に、100は3段にそれぞれ施されている。101は竹管による刺突文が施され、102は葦等の植物の茎と思われるものによる刺突文が施されている。

(5) 胴部に磨消帯を垂下させているもの (103～110)

103～107は2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。103は前々段多条縄文が、104～106は単節縄文RLが、107・108は単節縄文LRが、それぞれの地文に施文されている。109・110は3条の沈線で区画した磨消帯を垂下させ、地文には単節縄文RLが縦位回転で施文されている。

(6) 胴部に沈線が施されているもの(111～116)

111・112は沈線で区画され、区画内には単節縄文RLが、縦位と横位回転で施文されている。113・114は多条縄文が縦位回転で施文された後、蛇行沈線が施されている。115は渦巻文が施され、多条縄文が異方向に施文されている。116は沈線による楕円形文で区画され、区画内は複節縄文LRLが縦位回転で施文されている。

(7) 口縁部・胴部に櫛歯状条線文が施されているもの(117～124)

117・118は口縁部片である。117は口縁部上位に半截棒状工具による刺突文が施され、下位に太目の縦位の櫛歯状条線文が施されている。118の口縁部は無文で、下位に縦位の櫛歯状条線文が施されている。119～124は胴部片である。119・120は縦位の櫛歯状波状文が施され、120は異方向に縄文が施文されている。121～124は縦位の櫛歯状条線文が施されている。

### 第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	深鉢 縄文式土器	A [71.2] B (26.5)	口縁部から胴部へ至る破片。口縁部の文様帯は、隆線による長楕円形文の組み合わせで区画され、区画内には複節縄文LRLが横位回転で施文されている。胴部は、複節縄文LRLが縦位回転で施文され、3条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい 橙色 普通	P14 40% 炉周辺 覆土中層
2	深鉢 縄文式土器	A [25.7] B (14.6)	口縁部から胴部に至る破片。波状口縁で、渦巻の引かれた把手が設けられ、把手から口縁を巡る沈線が引かれている。口縁部の文様帯は、沈線による円形文と長楕円形文の組み合わせで区画され、区画内には単節縄文LRが横位回転で施文されている。胴部は、縦長の区画文が施され、区画内は単節縄文LRが縦位回転で施文されている。胴部には、縦断面三角形の扁平な突起が2対付く。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい 橙色 普通	P15 30% P <sub>6</sub> 周辺 覆土上層
3	深鉢 縄文式土器	A [50.7] B (28.2)	口縁部から胴部に至る破片。口縁部の文様帯は、隆線による楕円形文の組み合わせで区画され、区画内には単節縄文RLが横位回転で施文されている。胴部は単節縄文RLが縦位回転で施文され、2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい 褐色 普通	P16 20% P <sub>6</sub> 東側 覆土中層
4	深鉢 縄文式土器	A [31.0] B (13.2)	口縁部から胴部に至る破片。口縁部の文様帯は、隆線による楕円形文で区画され、区画内には単節縄文LRが横位回転で施文されている。胴部は単節縄文LRが縦位回転で施文され、2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。口縁部と胴部の間から、弧を描く沈線も施されている。内面は縦位のナデが施されている。	砂粒、スコリア にぶい 橙色 普通	P17 10% 炉南側 覆土中層
5	深鉢 縄文式土器	A [18.4] B (9.8)	口縁部から胴部に至る破片。口縁部は内彎し、口縁直下に1条の沈線を巡らしている。胴部は、単節縄文RLが縦位に施文され、3条の沈線で区画した細い磨消帯を上下に蛇行させている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい 橙色 普通	P18 10% P <sub>5</sub> 部 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第14図 6	有孔 鏝付土器 縄文式土器	A [14.0]	口縁部から肩部に至る破片。口縁部は短く内傾して立ち上がる。口縁部に平行して、肩部には隆起帯が巡らされている。隆起帯には、直交した穿孔が施されている。内・外面へラ状工具によるミガキ後、赤彩が施されている。	砂粒 灰褐色 良好	P19 5% 炉・P <sub>1</sub> 間 覆土下層
		B (2.0)			
7	深鉢 縄文式土器	B (14.8) C 7.5	胴下半部から底部に至る破片。胴部は単節縄文RLが縦位回転で施文され、2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。1条の沈線が縦に施されている磨消帯がある。胴下部は無文である。平底。胴下部外面は横位のナデが施されている。内面剥離。	砂粒 橙色 普通	P20 30% P <sub>1</sub> 東側 覆土中層
8	深鉢 縄文式土器	B (5.8) C 8.6	胴下半部から底部に至る破片。胴部は複節縄文LRLが縦位回転で施文され、3条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。胴下部外面は横位のナデ、内面は縦位のへら状工具によるミガキが施されている。	砂粒、長石 にぶい 橙色 普通	P21 10% P <sub>1</sub> 部 覆土中層
9	深鉢 縄文式土器	B (6.9) C 7.0	底部片。平底。胴下部外面は横位のナデが施されている。内面剥離。	砂粒 橙色 普通	P22 10% P <sub>1</sub> 西側 覆土下層
10	深鉢 縄文式土器	B (3.4) C 8.4	底部片。平底。胴下部外面は横位のナデが施され、底部外面はへら状工具によるミガキが施されている。内面剥離。	砂粒 橙色 普通	P23 5% P <sub>1</sub> 南側 覆土上層
第15図 11	深鉢 縄文式土器	B (2.8)	底部片。平底。胴下部外面は、横位のナデが施され、内面は縦位のナデが施されている。底部外面はへら状工具によるミガキが施されている。内面剥離。	砂粒、長石 橙色 普通	P24 5% 炉北西側 覆土中層
		C 8.7			
12	深鉢 縄文式土器	B (2.9) C 6.4	底部片。平底。胴下部外面は、横位のナデが施され、内面は縦位のナデが施されている。底部外面はへら状工具によるミガキが施されている。内面剥離。	砂粒、長石 にぶい 橙色 普通	P25 5% P <sub>1</sub> ・P <sub>2</sub> 間 覆土上層
13	深鉢 縄文式土器	B (3.9) C 6.0	底部片。平底。胴下部外面は、横位のナデが施され、内面は縦位のナデが施されている。	砂粒、長石 にぶい 橙色 普通	P26 5% 炉北西側 覆土上層
14	深鉢 縄文式土器	B (2.2) C 4.6	底部片。平底。底部内・外面はへら状工具によるナデが施されている。	砂粒 橙色 普通	P27 5% 炉北西側 覆土中層
15	深鉢 縄文式土器	B (3.5) C 8.0	底部片。突出気味の平底。胴下部外面は横位のナデが施されている。底部外面はへら状工具によるミガキが施されている。	砂粒、礫 にぶい 橙色 普通	P28 5% 炉南西側 覆土中層
16	深鉢 縄文式土器	B (4.6) C 7.0	底部片。平底。胴下部外面は横位のナデが施されている。底部内・外面剥離。	砂粒、スコリア 橙色 普通	P29 5% 西側壁 覆土上層
17	深鉢 縄文式土器	B 5.9 C 8.0	胴下部から底部に至る破片。胴部は単節縄文RLが縦位回転で施文され、2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。内面は横位のナデが施されている。平底。	砂粒、細礫 にぶい 褐色 普通	P30 5% 炉西部 覆土下層
18	深鉢 縄文式土器	B (4.3) C [7.4]	底部片。平底。胴下部内・外面は横位のナデが、底部内・外面はナデが施されている。	砂粒、長石 にぶい 褐色 普通	P31 5% P <sub>1</sub> ・P <sub>2</sub> 間 覆土上層
19	深鉢 縄文式土器	B (3.2) C [7.0]	底部片。突出気味の平底。内・外面剥離。	砂粒 にぶい 褐色 普通	P32 5% 炉・P <sub>1</sub> 間 覆土上層
20	深鉢 縄文式土器	B (2.3) C [6.4]	底部片。平底。胴下部外面は斜位の沈線が施され、内面は横位のナデが施されている。	砂粒 赤褐色 普通	P35 5% P <sub>1</sub> ・P <sub>2</sub> 間 覆土上層
21	深鉢 縄文式土器	B (3.3) C [7.0]	底部片。平底。胴下部外面は横位のナデが、内面は縦位のナデが施されている。	砂粒、礫 明赤褐色 普通	P36 5% P <sub>1</sub> ・P <sub>2</sub> 間 覆土上層
22	深鉢 縄文式土器	B (2.5) C [6.8]	底部片。平底。胴下部内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい 褐色 普通	P37 5% P <sub>1</sub> ・P <sub>2</sub> 間 覆土中層
23	深鉢 縄文式土器	B (1.7) C 4.0	底部片。平底。内・外面剥離。	砂粒 にぶい 褐色 普通	P38 5% 炉西側 覆土下層
24	深鉢 縄文式土器	B (2.3) C [5.6]	底部片。平底。胴下部内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい 褐色 普通	P39 5% 炉西側 覆土下層

図版番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第15図25	土製円板	5.0	4.3	0.9	21.4	100	覆土中	DP28
26	土製円板	(2.4)	(3.8)	0.8	(8.9)	50	覆土上層	DP29
27	土器片錘	6.0	5.6	1.8	60.1	100	覆土中	DP30
28	土器片錘	5.0	4.2	1.3	41.1	100	覆土中	DP31
29	土器片錘	4.7	5.0	1.3	32.0	100	覆土中	DP32
30	土器片錘	5.2	4.2	1.4	30.6	100	覆土中	DP33
31	土器片錘	6.0	4.4	1.4	34.8	100	覆土中	DP34
32	土器片錘	5.7	3.6	1.2	29.5	100	覆土中	DP35
33	土器片錘	6.0	3.6	1.5	37.0	100	覆土中	DP36
34	土器片錘	5.0	3.9	0.9	22.8	100	覆土中	DP37
35	土器片錘	5.1	3.9	1.2	34.4	100	覆土中	DP38
36	土器片錘	4.4	5.5	0.9	24.0	100	覆土中	DP39
37	土器片錘	4.6	4.1	1.0	25.4	100	覆土中	DP40
38	土器片錘	4.4	4.2	0.9	19.8	100	覆土中	DP41
39	土器片錘	4.6	3.9	1.0	20.3	100	覆土中	DP42
40	土器片錘	5.1	3.6	0.9	18.8	100	覆土中	DP43
41	土器片錘	4.4	4.2	1.0	25.3	100	炉東側覆土上層	DP44
42	土器片錘	5.0	3.3	1.0	21.0	100	覆土中	DP45
43	土器片錘	5.2	3.3	0.9	18.7	100	覆土中	DP46
44	土器片錘	4.2	3.9	1.2	26.9	100	覆土中	DP47
45	土器片錘	4.3	3.6	1.0	18.9	100	炉床	DP48
46	土器片錘	4.8	2.7	0.8	13.2	100	覆土中	DP49
47	土器片錘	3.9	3.6	1.5	23.7	100	覆土中	DP50
48	土器片錘	4.1	4.2	0.9	21.3	100	覆土中	DP51
49	土器片錘	4.1	3.9	0.8	16.1	100	覆土中	DP52
50	土器片錘	4.9	3.2	1.3	21.9	100	覆土中	DP53
51	土器片錘	4.8	3.8	1.2	22.1	100	覆土中	DP54
52	土器片錘	4.0	5.2	0.9	21.7	100	覆土中	DP55
53	土器片錘	4.3	3.0	1.4	20.5	100	覆土中	DP56
54	土器片錘	4.2	3.4	1.1	13.5	100	覆土中	DP57
55	土器片錘	4.3	3.2	1.2	14.6	100	覆土中	DP58
56	土器片錘	4.2	4.0	1.0	15.0	100	P <sub>s</sub> ・P <sub>o</sub> 間覆土上層	DP59
57	土器片錘	4.5	3.5	0.7	17.4	100	覆土中	DP60
58	土器片錘	3.5	3.9	1.5	23.9	100	覆土中	DP61
59	土器片錘	4.2	3.5	0.9	16.5	100	覆土中	DP62
60	土器片錘	4.1	3.5	0.9	14.7	100	覆土中	DP63
61	土器片錘	3.7	3.7	1.1	15.4	100	覆土上層	DP64
62	土器片錘	3.8	3.6	0.9	12.2	100	覆土中	DP65
63	土器片錘	4.3	3.1	0.7	11.6	100	覆土中	DP66
64	土器片錘	4.1	3.1	0.8	13.7	100	覆土中	DP67
65	土器片錘	3.0	3.6	1.1	13.4	100	覆土上層	DP68
第16図66	土器片錘	3.6	2.2	1.4	18.6	100	炉西側覆土上層	DP69
67	土器片錘	3.8	4.2	1.2	23.4	100	覆土中	DP70
68	土器片錘	3.6	3.2	1.0	11.7	100	覆土中	DP71

図版番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第16図69	土器片錘	4.0	2.7	0.8	10.6	100	覆土中	DP72
70	土器片錘	3.8	2.0	1.1	10.1	100	覆土中	DP73
71	土器片錘	3.9	2.4	0.9	10.5	100	覆土中	DP74
72	土器片錘	3.4	3.0	1.4	13.7	100	覆土中	DP75
73	土器片錘	3.5	3.0	1.0	(10.0)	80	覆土中	DP76
74	土器片錘	3.0	3.3	0.8	8.6	100	P <sub>3</sub> 部覆土上層	DP77
75	土器片錘	3.3	2.1	0.9	8.6	100	覆土中	DP78
76	土器片錘	2.8	2.2	0.9	6.4	100	覆土中	DP79
77	土器片錘	2.4	2.3	0.8	4.1	100	覆土中	DP80

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第16図78	石 鏃	( 2.5)	2.3	0.7	( 2.1)	チャート	覆土中	Q 3
79	凹 石	(10.8)	(8.3)	5.0	(286.9)	安山岩	炉北西側覆土上層	Q 4
80	砥 石	( 8.5)	7.7	3.4	(230.8)	安山岩	炉北西側覆土上層	Q 5
81	敲 石	( 9.5)	4.0	3.7	(218.7)	砂 岩	P <sub>3</sub> 部覆土上層	Q 6
82	磨 石	6.3	5.0	4.2	177.1	砂 岩	炉内	Q 7
83	有孔軽石	5.4	3.0	2.5	6.0	軽 石	炉北東側覆土下層	Q 8 (孔径0.9×0.7)

表2 日枝西遺跡竪穴住居跡一覧表

住居番号	位置	長軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	内部施設				覆土	出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)			主柱穴	入口	ピット	炉			
1	C1b <sub>9</sub>	N-79°-W	楕円形	6.25×5.57	20~30	平坦	6	0	7	1	人為	縄文式土器, 土製品, 石器, 石製品	地点貝塚
2	B1j <sub>7</sub>	N-55°-E	円形	4.53×4.20	15~20	平坦	6	0	6	1	人為	縄文式土器, 土製品	
3	B1f <sub>6</sub>	N-72°-W	円形	7.77×7.45	30~45	平坦	7	0	7	1	人為	縄文式土器, 土製品, 石器, 石製品	SK-26, 27, 28, 55と重複 地点貝塚

## 2 土 坑

当遺跡からは、38基の土坑が確認されたが、出土遺物が少なく時期や性格について不明な点が多い。ここでは、土坑のうち形状や規模、覆土の状態や出土遺物について特徴がある6基の土坑について個々に説明を加え、その他については一覧表(表3)にした。

### 第1号土坑(第19図)

位置 B1b<sub>3</sub>区

規模と平面形 長径0.78m, 短径0.62mの不整楕円形で、深さは0.44mである。

長径方向 N-28°-E

壁面 ならやかに外傾して立ち上がっている。

底面 皿状である。

覆土 ローム粒子を多量に含む明褐色土である。

遺物 覆土中層から下層にかけて縄文式土器(加曾利E III式深鉢の口縁部片および胴部片10点)が出土している。

所見 本跡は、出土遺物等から縄文時代中期(加曾利E III式期)の土坑と思われるが、性格については不明である。

### 第5号土坑(第19図)

位置 B1c<sub>2</sub>区

規模と平面形 長径1.14m, 短径0.86mの長方形で、深さは0.85mである。

長径方向 N-69°-E

壁面 垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。

覆土 ローム小ブロックや炭化物を含む褐色土である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期や、性格については不明である。

### 第6号土坑(第19図)

位置 B1d<sub>2</sub>区

規模と平面形 長径1.28m, 短径0.90mの長方形で、深さは0.88mである。

長径方向 N-73°-E

壁面 垂直に立ち上がっている。



底面 平坦である。

覆土 ローム小ブロックや炭化物を含む褐色土である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期や性格については不明である。

#### 第12号土坑（第20図）

位置 B1j<sub>s</sub>区

規模と平面形 長径1.75m，短径1.55mの不整楕円形で，深さは1.20mである。

長径方向 N-53°-E

壁面 壁は内傾して立ち上がり，上位は垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。長径3.50m，短径3.00mの不整楕円形である。

覆土 ローム粒子を含む褐色土である。

遺物 出土していない。

所見 本跡はフラスコ状土坑であるが，時期や性格については不明である。

#### 第42号土坑（第22図）

位置 C1f<sub>r</sub>区

規模と平面形 長径1.10m，短径0.92mの隅丸長方形で，深さは0.42mである。

長径方向 N-6°-E

壁面 垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。

覆土 ローム小ブロックを含む褐色土である。

遺物 覆土中層から，土師器の甕の体部片が出土している。

所見 本跡の時期や，性格については不明である。

#### 第55号土坑（第22図）

位置 B1e<sub>s</sub>区

重複関係 第3号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径2.96m，短径0.54mの長楕円形で，深さは0.84mである。

長径方向 N-31°-W

壁面 垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。

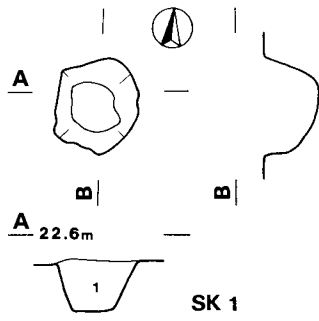
覆土 ローム粒子を含む褐色土である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、重複関係から縄文時代中期の第3号住居跡（加曾利EⅢ式期）より新しい時期に構築された、陥し穴である。

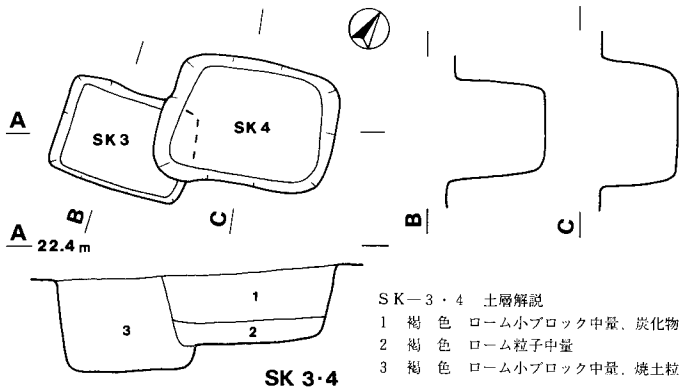
表3 日枝西遺跡土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版 番号
				長径×短径	深さ						
1	B1b <sub>3</sub>	N-28°-E	不整楕円形	0.78×0.62	0.44	外傾	皿状	自然	縄文式土器片		第19図
2	B1b <sub>4</sub>	N-72°-W	長方形	1.50×0.90	0.20	緩斜	平坦	人為			19
3	B1c <sub>2</sub>	N-71°-E	長方形	1.06×0.77	0.74	垂直	平坦	人為		SK-4と重複	19
4	B1c <sub>2</sub>	N-67°-E	長方形	1.30×0.98	0.55	垂直	平坦	人為		SK-3と重複	19
5	B1c <sub>2</sub>	N-69°-E	長方形	1.14×0.80	0.85	垂直	平坦	人為			19
6	B1d <sub>2</sub>	N-73°-E	長方形	1.28×0.90	0.88	垂直	平坦	人為			19
7	B1c <sub>5</sub>	N-15°-E	楕円形	1.70×1.28	0.24	緩斜	平坦	自然			19
10	B1h <sub>6</sub>	N-0°	長方形	1.86×1.06	0.80	垂直	平坦	人為			19
11	B1h <sub>5</sub>	N-19°-W	隅丸方形	1.00×1.00	0.16	緩斜	凹凸	人為			19
12	B1j <sub>5</sub>	N-53°-W	不整楕円形	1.88×1.68	1.20	内傾	平坦	自然			20
14	C1b <sub>6</sub>	N-12°-W	[長方形]	0.70×0.40	0.53	垂直	平坦	人為			20
15	C1b <sub>6</sub>	N-71°-W	長方形	0.76×0.62	0.25	垂直	皿状	人為			20
16	C1c <sub>6</sub>	N-90°-E	長方形	0.72×0.56	0.20	緩斜	皿状	人為			20
17	C1b <sub>6</sub>	N-81°-W	長方形	1.36×0.66	0.60	垂直	平坦	人為			20
20	B1g <sub>5</sub>	N-13°-W	楕円形	1.70×1.22	0.38	緩斜	平坦	人為			20
22	B1e <sub>5</sub>	N-39°-W	楕円形	1.18×0.80	0.34	垂直	皿状	人為			20
23	B1e <sub>4</sub>	N-83°-W	楕円形	1.26×0.78	0.24	垂直	凹凸	人為			20
26	B1e <sub>5</sub>	N-8°-W	隅丸方形	1.70×1.46	0.40	垂直	平坦	人為	縄文式土器片	SI-3と重複	20
26	B1e <sub>6</sub>	N-90°-E	円形	1.30×1.24	0.54	垂直	平坦	人為	縄文式土器片	SI-3と重複	21
28	B1e <sub>6</sub>	N-0°	楕円形	1.22×0.98	0.55	垂直	平坦	人為	縄文式土器片	SI-3と重複	21
29	B1g <sub>6</sub>	N-0°	円形	1.02×0.90	0.90	緩斜	凹凸	人為			21
30	B1g <sub>5</sub>	N-43°-E	楕円形	1.28×1.12	0.50	垂直	平坦	人為			21
34	C1b <sub>6</sub>	N-49°-E	円形	0.66×0.62	0.48	垂直	平坦	自然			21
35	C1b <sub>6</sub>	N-20°-E	円形	0.62×0.54	0.42	垂直	皿状	人為			21
36	C1c <sub>7</sub>	N-72°-W	長方形	0.88×0.62	0.36	垂直	平坦	人為			21
37	C1c <sub>7</sub>	N-74°-E	不整形	0.88×0.84	0.34	垂直	平坦	人為			21
38	C1c <sub>7</sub>	N-7°-E	長方形	1.10×0.76	0.25	垂直	平坦	人為			21
40	C1c <sub>8</sub>	N-9°-E	長方形	1.42×0.96	0.38	垂直	平坦	人為			21
41	C1f <sub>8</sub>	N-11°-E	長方形	1.30×1.04	0.46	垂直	平坦	人為			21
42	C1f <sub>7</sub>	N-6°-E	隅丸長方形	1.10×0.92	0.42	垂直	平坦	人為	土師器		22
43	C1f <sub>8</sub>	N-79°-W	長方形	1.58×0.70	0.45	垂直	平坦	人為			22
44	C1f <sub>9</sub>	N-14°-E	長方形	1.30×0.94	0.65	垂直	平坦	人為			22
45	C2g <sub>1</sub>	N-46°-W	不整円形	1.62×1.42	0.38	垂直	平坦	人為	土師器		22
46	C2d <sub>9</sub>	N-47°-W	円形	1.30×0.94	0.30	緩斜	凹凸	人為			22
48	D1b <sub>6</sub>	N-13°-E	長方形	1.68×0.82	0.66	垂直	平坦	人為			22
52	C1a <sub>9</sub>	N-44°-E	楕円形	1.08×0.72	0.22	緩斜	皿状	人為			22
54	C1a <sub>8</sub>	N-50°-E	楕円形	1.02×0.86	0.28	緩斜	皿状	人為			22
55	B1e <sub>5</sub>	N-31°-W	長楕円形	2.96×0.54	0.84	垂直	平坦	自然		SI-3と重複 陥し穴	22



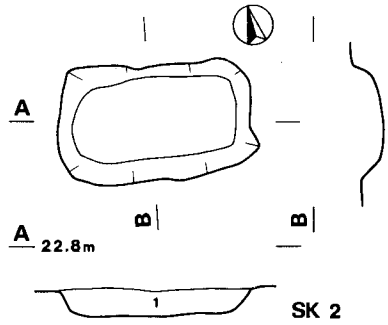
SK-1 土層解説

1 明褐色 ローム粒子多量, 炭化物少量



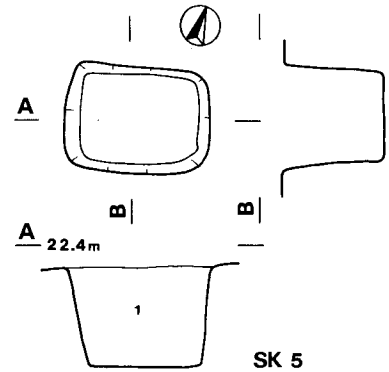
SK-3・4 土層解説

1 褐色 ローム小ブロック中量, 炭化物少量  
2 褐色 ローム粒子中量  
3 褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子少量



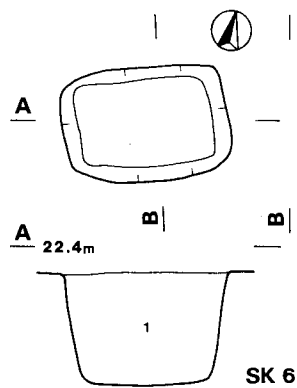
SK-2 土層解説

1 暗褐色 ローム中ブロック中量,  
ローム大ブロック少量,  
炭化物少量



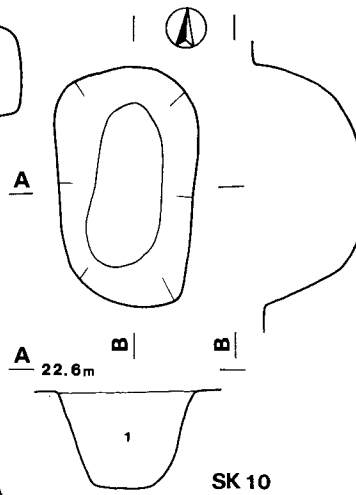
SK-5 土層解説

1 褐色 ローム小ブロック中量,  
炭化物少量



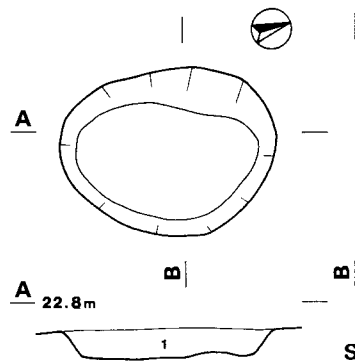
SK-6 土層解説

1 褐色 ローム小ブロック中量, 炭化物少量



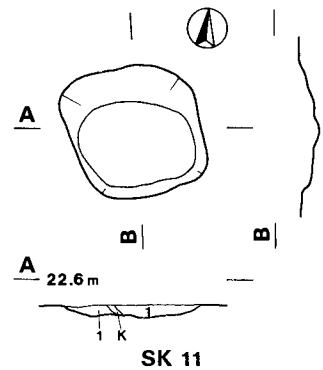
SK-10 土層解説

1 褐色 ローム小・中ブロック多量,  
ローム大ブロック中量,  
焼土粒子・炭化物少量



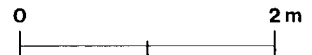
SK-7 土層解説

1 明褐色 ローム粒子多量, 黒色土少量

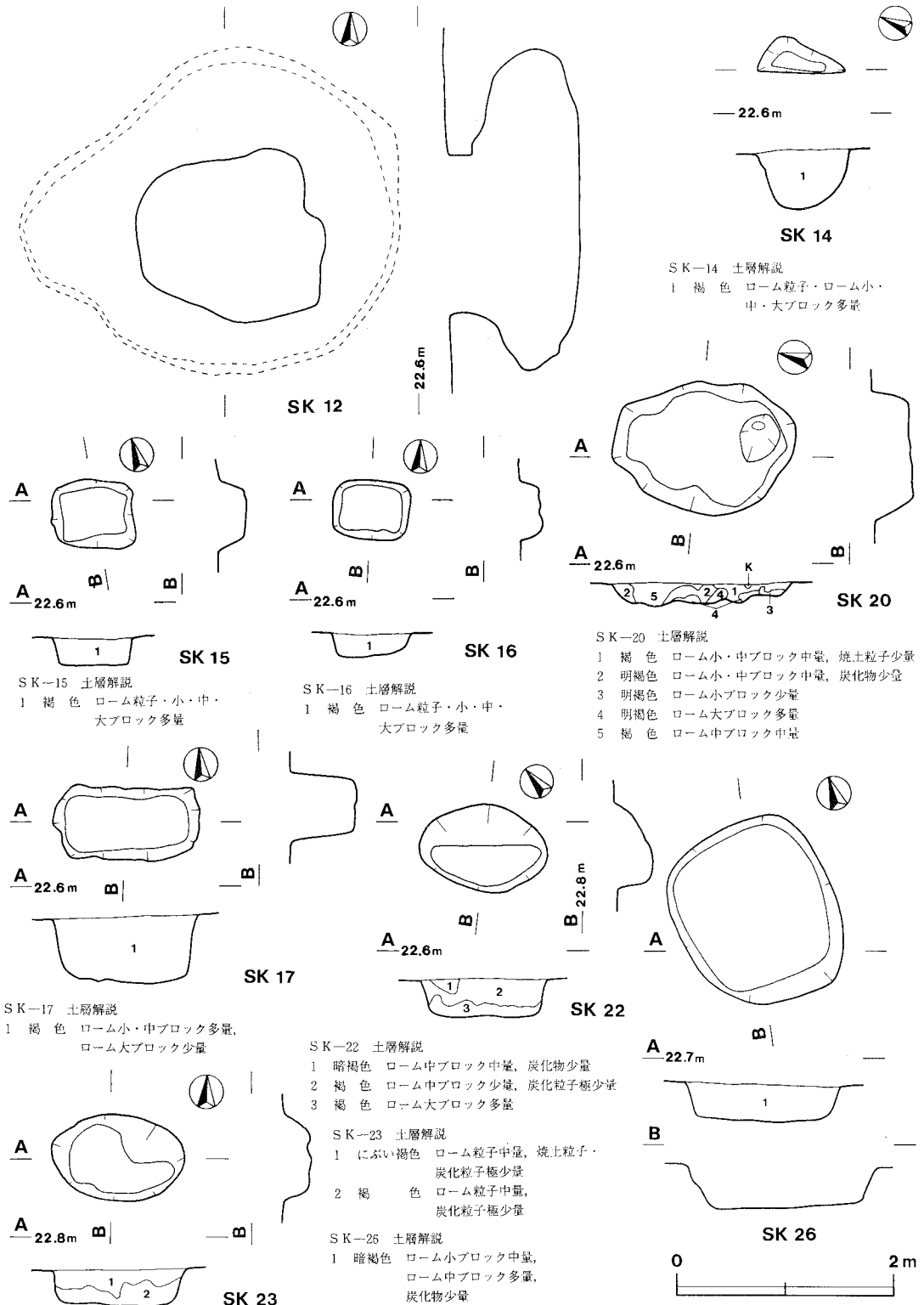


SK-11 土層解説

1 褐色 ローム粒子極めて多量,  
ローム小ブロック中量,  
炭化物少量



第19図 土坑実測図(1)



SK 12

SK 14

SK-14 土層解説  
1 褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック多量

SK 15

SK-15 土層解説  
1 褐色 ローム粒子・小・中・大ブロック多量

SK 16

SK-16 土層解説  
1 褐色 ローム粒子・小・中・大ブロック多量

SK 20

SK-20 土層解説  
1 褐色 ローム小・中ブロック中量, 焼土粒子少量  
2 明褐色 ローム小・中ブロック中量, 炭化物少量  
3 明褐色 ローム小ブロック少量  
4 明褐色 ローム大ブロック多量  
5 褐色 ローム中ブロック中量

SK 17

SK-17 土層解説  
1 褐色 ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック少量

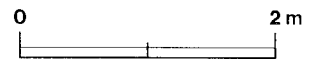
SK 22

SK-22 土層解説  
1 暗褐色 ローム中ブロック中量, 炭化物少量  
2 褐色 ローム中ブロック少量, 炭化粒子極少量  
3 褐色 ローム大ブロック多量

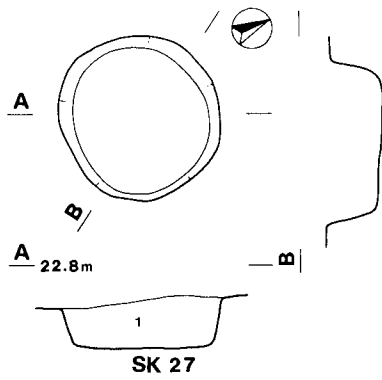
SK 26

SK-23 土層解説  
1 にぶい褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子極少量  
2 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子極少量

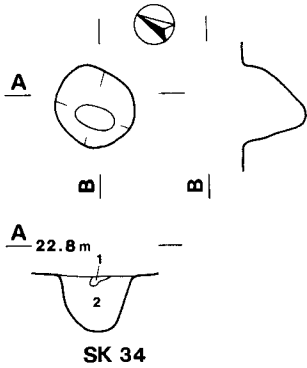
SK-26 土層解説  
1 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック多量, 炭化物少量



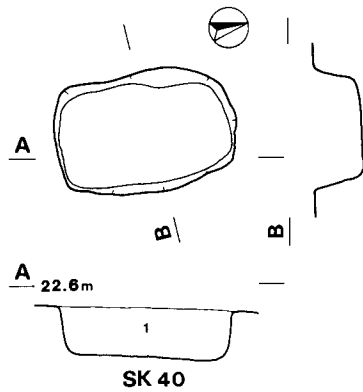
第20図 土坑実測図(2)



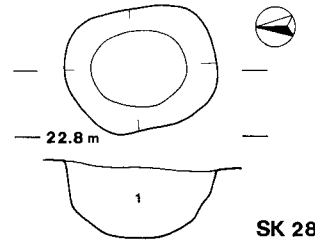
SK-27 土層解説  
1 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック中量, 焼土粒子少量



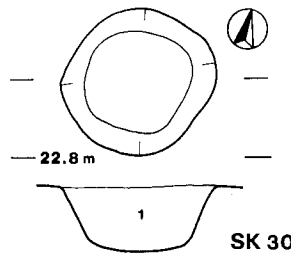
SK-34 土層解説  
1 褐色 ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量  
2 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量



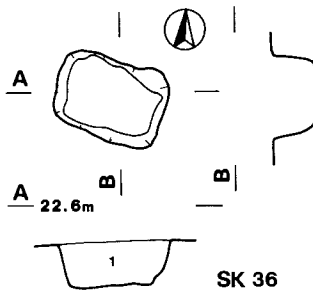
SK-40 土層解説  
1 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, 炭化物少量



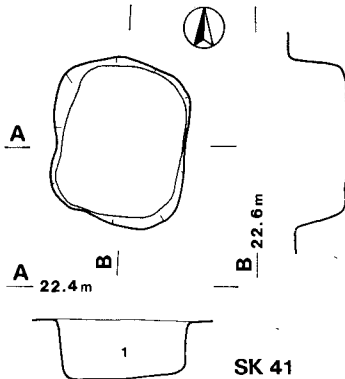
SK-28 土層解説  
1 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック中量, 焼土粒子少量



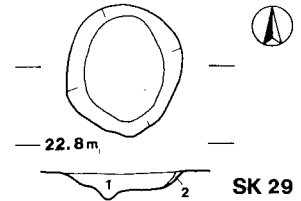
SK-30 土層解説  
1 暗褐色 ローム大ブロック多量, 炭化物少量



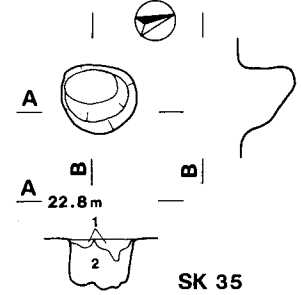
SK-36 土層解説  
1 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, 炭化物少量



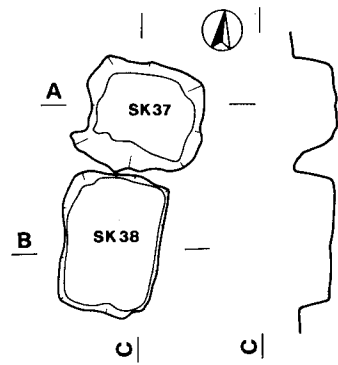
SK-41 土層解説  
1 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, 炭化物少量



SK-29 土層解説  
1 にぶい褐色 ローム粒子多量  
2 褐色 ローム粒子中量



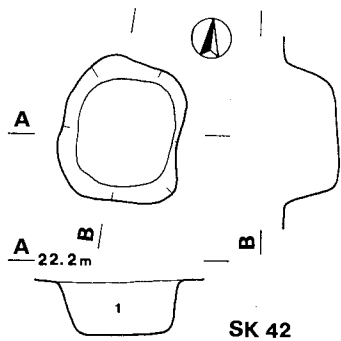
SK-35 土層解説  
1 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量  
2 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量



SK-37・38 土層解説  
1 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, 炭化物少量



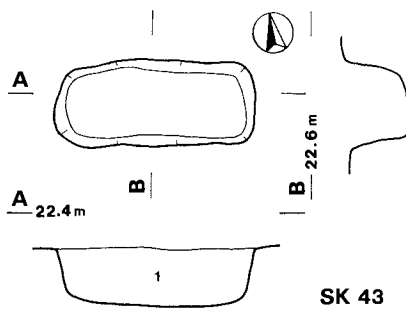
第21図 土坑実測図 (3)



SK 42

SK-42 土層解説

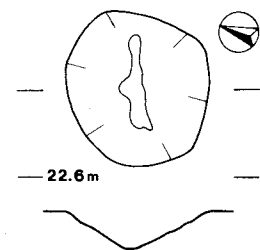
1 褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック中量



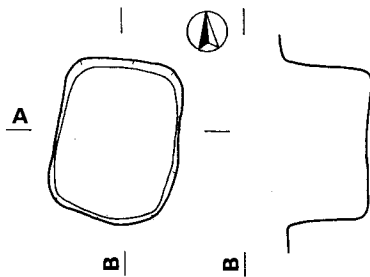
SK 43

SK-43 土層解説

1 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, 炭化物少量



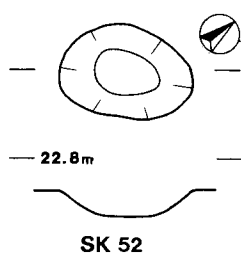
SK 46



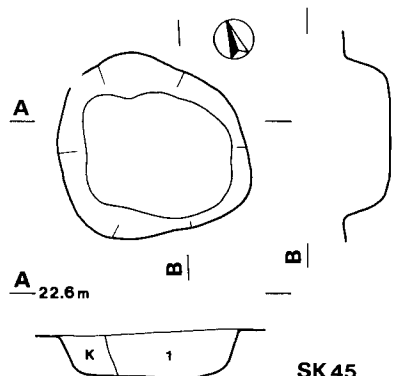
SK 44

SK-44 土層解説

1 褐色 ローム中ブロック多量, ローム大ブロック少量



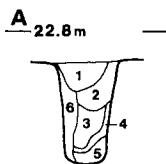
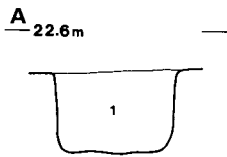
SK 52



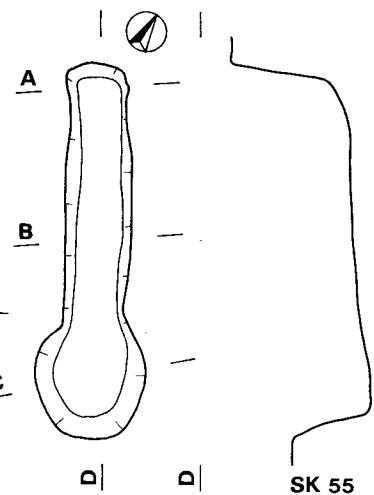
SK 45

SK-45 土層解説

1 褐色 ローム粒子・中ブロック多量



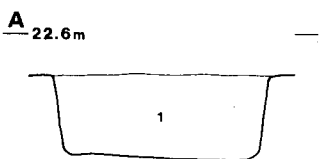
SK 54



SK 55

SK-55 土層解説

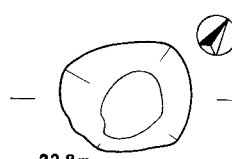
- 1 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子極少量
- 2 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, 炭化物少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 明褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子極少量



SK 48

SK-48 土層解説

1 灰褐色 ローム中ブロック中量



第22図 土坑実測図 (4)


### 3 溝

当遺跡からは、1条の溝が確認されたが、後世の攪乱が多く、出土遺物がないため時期や性格について明らかにすることは困難であった。ここでは、調査結果に基づき溝の規模や形状等を中心に記載する。

#### 第1号溝（第23図）

位置 Cl<sub>a6</sub>区からCl<sub>a7</sub>区

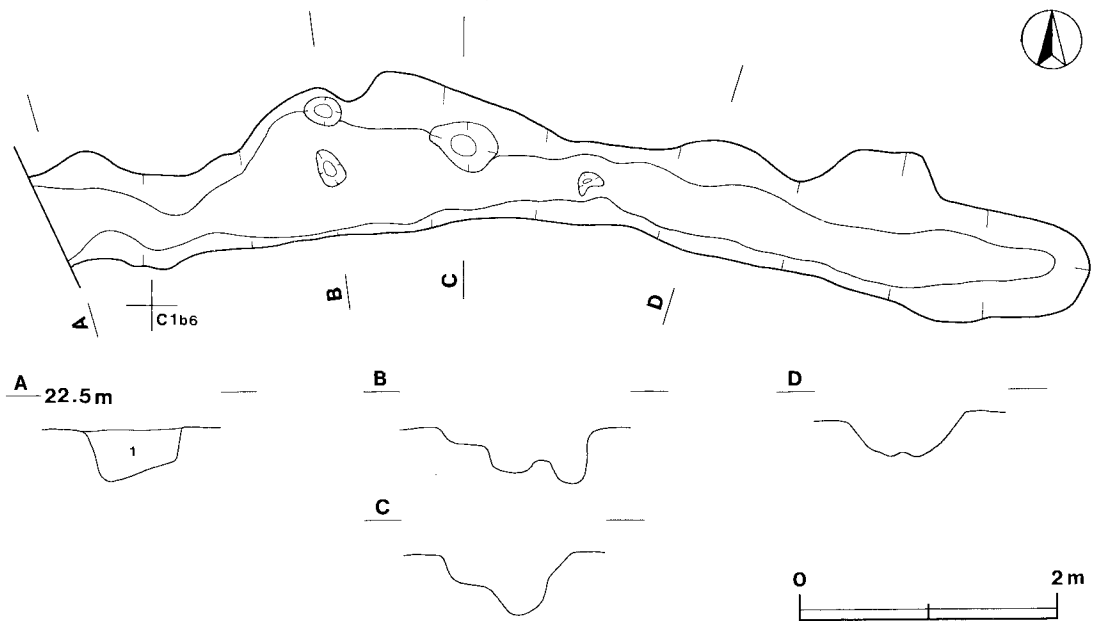
重複関係 Cl<sub>a7</sub>区で第13号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 Cl<sub>a7</sub>区から西へゆるい放物線を描くように延びている。確認された長さ8.20m、上幅0.60～1.20m、下幅0.30～0.60m、深さ0.35～0.55mで、断面「」状に掘り込まれている。底面は凹凸で、壁は外傾して立ち上がっている。溝の西端は調査区外に延びている。

方向 N-80°-W

覆土 ロームブロックを含む暗褐色土である。

所見 本跡は出土遺物もなく、詳細な時期や性格については不明である。



第23図 第1号溝実測図

#### 4 地点貝塚

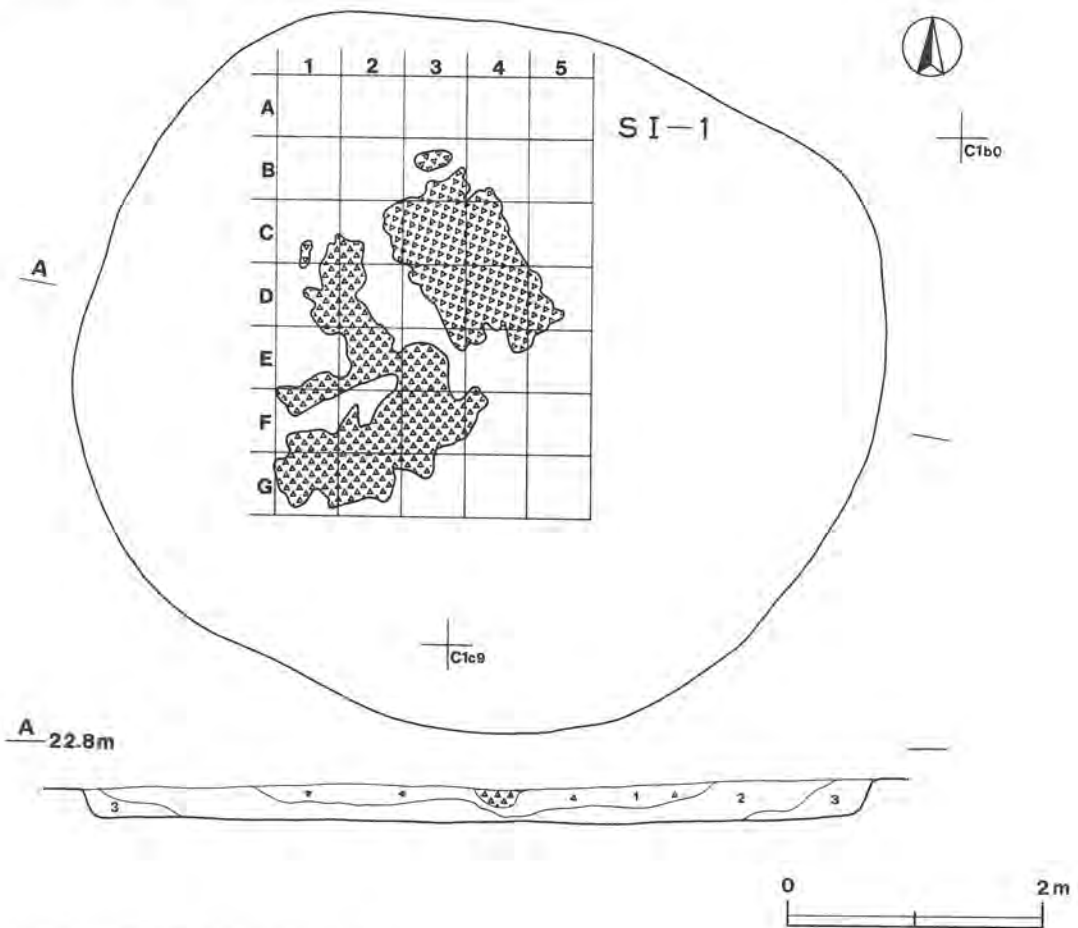
当遺跡の、第1・3号住居跡（縄文時代中期加曾利EⅢ式期）から、地点貝塚が確認されている。ここでは、調査結果に基づき地点貝塚の規模や堆積状況等を中心に記載する。

##### 第1号地点貝塚（第24図）

位置 C1b<sub>8</sub>区からC1b<sub>9</sub>区。

重複関係 第1号住居跡のほぼ中央の覆土全体に確認されている。

規模と堆積状況 貝の堆積は、東西約3.0m、南北約2.5mの範囲の中に、不定形の広がりて確認されている。貝層は、純貝層、混土貝層、混貝土層に分層される。全体として覆土の上層から中層にかけては純貝層が、中層には混土貝層が、下層には混貝土層が認められる。貝層の大部分は、床面から10cm程上位から堆積しているが、貝が床面まで達している箇所が一部確認されている。層厚は、15～40cm程である。



第24図 第1号地点貝塚実測図



**遺物** 貝種は淡水産のヤマトシジミのみで、出土量は遺物収納箱(60×40×20cm)に8箱程、総重量は約120kgである。投棄されたものと思われる縄文式土器片が混貝土層中から出土している。  
**所見** 本跡は、貝層内の出土遺物等から、縄文時代中期(加曾利E III式期)の地点貝塚と思われる。また、堆積状況から、第1号住居跡の廃絶後に貝の投棄が行われたものと思われる。

第1号地点貝塚のヤマトシジミについては、第24図に示すように堆積範囲に50cmのメッシュを組んで小グリッドに分け、グリッド毎に取り上げて、ヤマトシジミと土の重量を計測した。計測した結果については、表4に示す。(各グリッドの上段がヤマトシジミの重量、下段が土の重量)

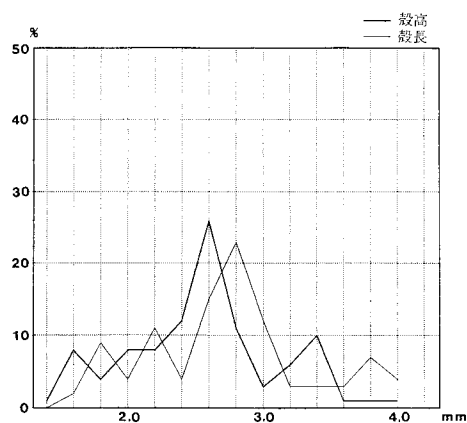
ヤマトシジミの殻長・殻高分布グラフ(第25図)

完形のヤマトシジミを比較的多量に含むC4ブロックについて、ヤマトシジミの殻長・殻高の分布グラフを作成した。任意に100個の貝殻(520.4g)を取り出して、それぞれ殻長・殻高を2mm単位で測定した。

表4 第1号地点貝塚

小グリッド毎のヤマトシジミ・土の重量一覧表

	1	2	3	4	5	計
A	0	0	0.1	0	0	0.1
	0	0	1.5	0	0	1.5
B	0.2	0.3	5.0	2.5	0.1	8.1
	3.0	2.4	14.5	15.4	0.5	35.8
C	3.0	9.8	5.2	16.9	21.6	56.5
	5.5	15.8	12.9	29.9	30.8	94.9
D	0	1.5	1.2	0.4	12.6	15.7
	4.9	7.0	4.1	0.6	26.4	43.0
E	0.1	1.3	5.0	14.4	0.8	21.6
	0.9	4.6	9.7	25.0	1.0	41.2
F	0.1	0.8	6.5	8.8	0	16.2
	1.0	8.3	16.5	16.5	0	42.3
G	1.0	0.7	0.1	0	0	1.8
	1.8	6.0	1.8	0	0	9.6
計	4.4	14.4	23.1	43.0	35.1	120.0
	17.1	44.1	61.0	87.4	58.7	268.3



第25図 第1号地点貝塚出土ヤマトシジミ 殻長・殻高分布グラフ

※ 堆積範囲に小グリッド(50cmメッシュ)を設定 (単位はKg)

## 第2号地点貝塚(第26図)

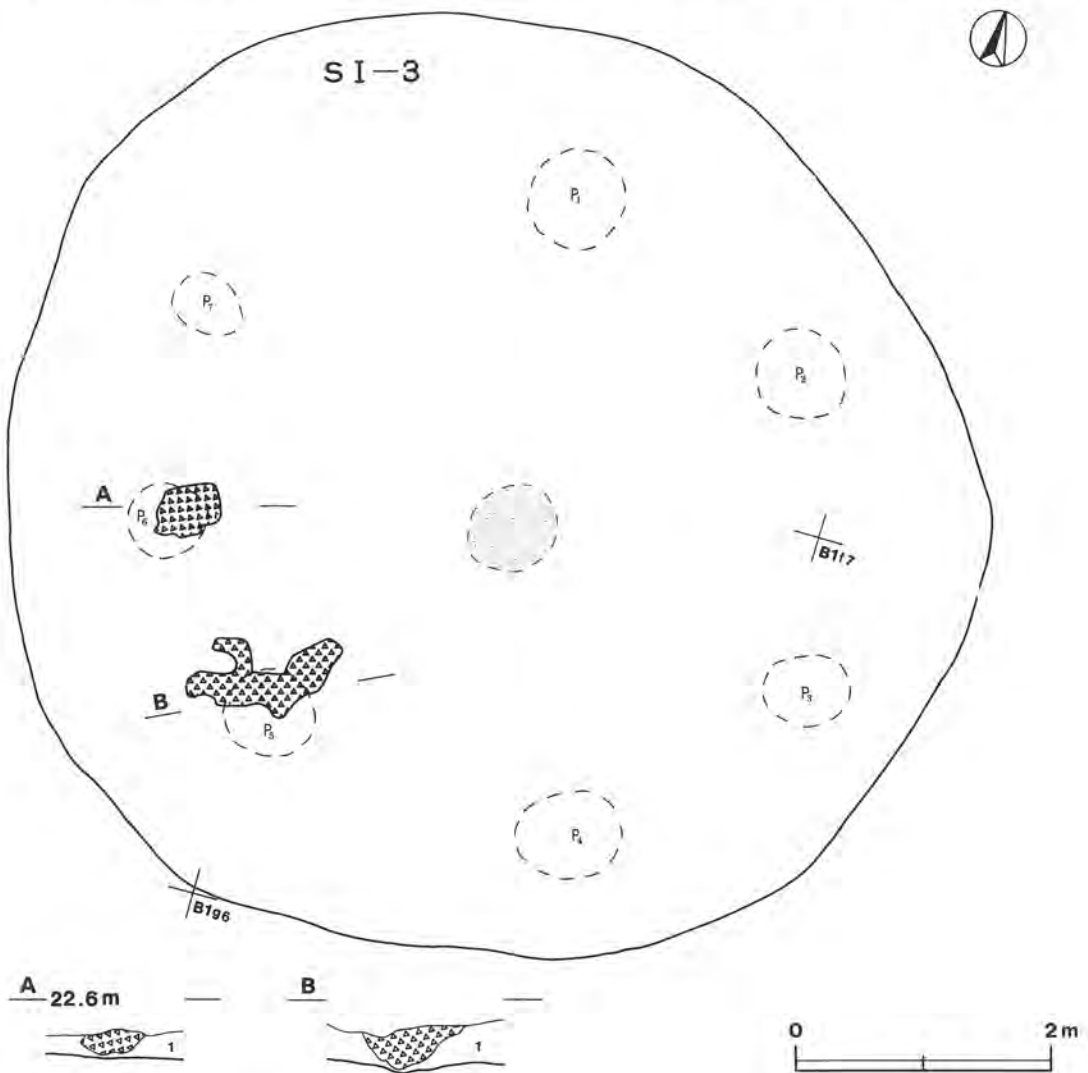
**位置** B1f<sub>5</sub>区からB1f<sub>6</sub>区。

**重複関係** 第3号住居跡の南西部の覆土下層から確認されている。

**規模と堆積状況** 貝の堆積は2地点に分かれ、A地点（P<sub>6</sub>の上位）が長径120cm程、短径50cm程の細長い不定形状で、B地点（P<sub>5</sub>の上位）が長径50cm程、短径40cm程の不定楕円形状で確認されている。貝層は純貝層と混土貝層からなり、床面から2～3cm程上位から堆積している。層厚は、2地点共20～40cm程である。

**遺物** 貝種は淡水産のヤマトシジミのみで、出土量は遺物収納箱(60×40×20cm)に2箱程である。A地点の貝の総重量は4.5kg、B地点の貝の総重量は31.5kgである。貝層の中からは他の遺物は出土していないが、周囲の覆土中及び貝層の上層から、投棄されたものと思われる縄文式土器片が多量に出土している。

**所見** 本跡は、貝層周囲の出土遺物等から、縄文時代中期（加曾利EⅢ式期）の地点貝塚と思われる。

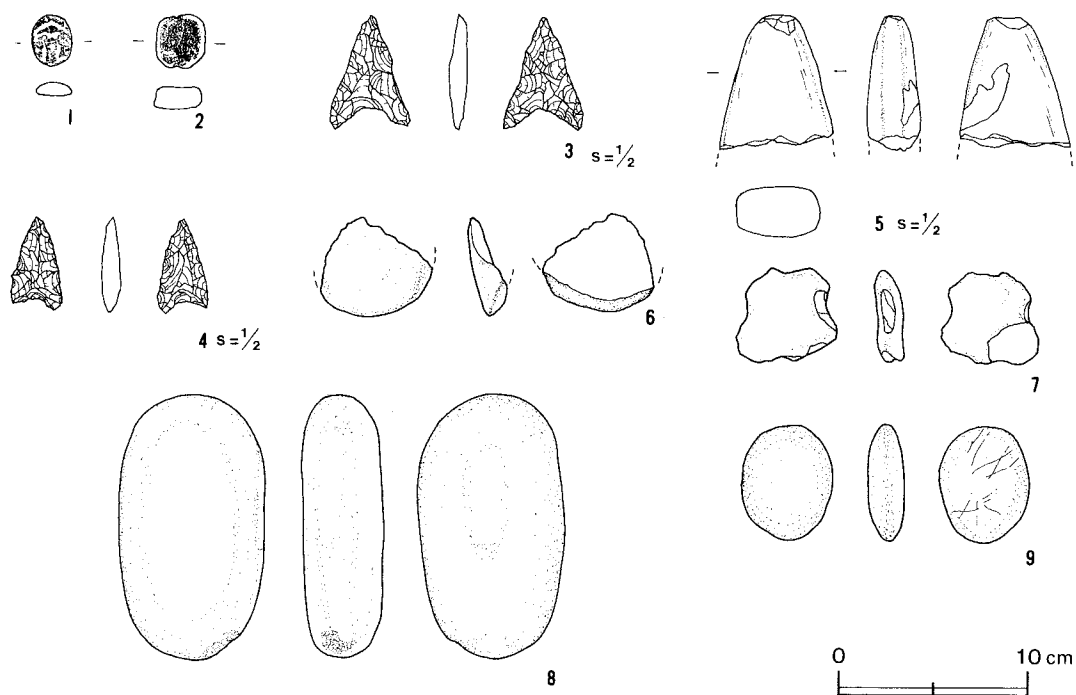


第26図 第2号地点貝塚実測図

れる。また、堆積状況から、第3号住居跡の廃絶後に貝の投棄が行われたものと思われる。

## 5 遺構外出土遺物

当調査区の遺構外出土遺物について、観察表、実測図及び拓影図でその一部を紹介する。



第27図 遺構外出土遺物実測・拓影図

### 遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第27図 1	泥面子	2.7	2.2	0.7	3.6	100	表採	DP81
2	土器片錘	2.9	2.5	1.2	9.6	100	表採	DP82

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第27図 3	石 鏃	3.0	2.1	0.5	1.6	チャートB区	表採	Q 9
4	石 鏃	2.4	(1.4)	0.5	( 1.5)	チャートB区	表採	Q10
5	磨製石斧	(3.5)	3.0	1.4	(20.0)	蛇紋岩	表採	Q11
6	磨製石斧	(5.3)	(5.8)	(2.1)	(47.9)	緑色凝灰岩	表採	Q12
7	石 錘	5.0	5.2	1.5	45.6	頁岩	表採	Q13
8	磨石	14.0	7.8	4.5	734.6	安山岩	表採	Q14

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第27図9	磨石	6.2	4.7	1.8	78.5	安山岩	表採	Q15

### 第3節 まとめ

日枝西遺跡は、今回の調査によって縄文時代の住居跡が3軒確認された。時期は、出土遺物等から、いずれも中期後半の加曾利E III式期と考えられる。ここでは、3軒の住居跡の形態や出土した遺物等についてのまとめとする。

3軒の住居跡の平面形は、円形ないし楕円形で、炉は地床炉であり、住居跡のほぼ中央部に付設されている。床面積をみると、第1号住居跡は27.4㎡、第2号住居跡は15.0㎡、第3号住居跡は45.5㎡程で、第1・3号住居跡に比べ、第2号住居跡が小型の住居跡となっている。

第1号住居跡からは、約120kg、第3号住居跡からは約36.0kgのヤマトシジミが出土しているが、第2号住居跡からは出土していない。このことから、第2号住居跡は第1・3号住居跡よりも新しい可能性をもつと考えられる。

遺物は、投棄されたと思われる加曾利E III式期の深鉢等の破片が多く、特に、第3号住居跡からは遺物収納箱(60×40×20cm)に8箱程出土している。住居廃絶後の土器の投棄は吹上パターンといわれるタイプであり、3軒の住居跡からは、完形の土器は1個体も出土していない。土器片の中には、太い隆帯による渦巻文の施されたもの、波状口縁に把手が設けられたもの、櫛歯状沈線文や刺突文の施された粗製土器、複節縄文の施された精製土器等が含まれている。また、祭祀に使用されたと思われる「陽物土製品」、赤彩された「有孔鏝付土器」も出土している。出土した土器の量に比べ、石器・石製品の出土量は少ないが、雑な作りの土器片は77個出土している。当遺跡は、縄文時代中期後半に集落が形成されている。集落については、調査区が道路幅という限定された範囲であるため、全容を明らかにすることはできないが、この同一台地上の北西約0.5km程にある小山台貝塚との関連性が注目される。

#### 参考文献

- (1) 茎崎町教育委員会 『茎崎村史』 1973年
- (2) 小山台発掘調査団 『小山台貝塚』 1976年
- (3) 取手市教育委員会 『取手市史 原始古代(考古)資料編』 1989年
- (4) 長崎元広 「縄文の男根状土製品」『長野県考古学会誌』 1976年
- (5) 石野博信 『日本の原始・古代住居の研究』 吉川弘文館 1990年

## 第4章 上岩崎南遺跡

### 第1節 遺跡の概要

上岩崎南遺跡は、稲敷郡茎崎町の西部（上岩崎地区）、西谷田川左岸の標高21～22mの台地上に立地している。現況は畑で、今回の調査区域は、南北に約39m、東西に約18m、面積703㎡である。

今回の調査によって、中・近世の溝1条が確認されている。

第1号溝は、調査区の南部をほぼ東西に横切るように確認され、東西の両端はさらに調査区外に延びている。また、第1号溝の南部壁際に小型の溝が確認され、西端は調査区外に延びている。

溝の覆土内から、古銭（永樂通寶）や縄文式土器片が出土しているが、溝の時期や性格について判断できる遺物は、出土していない。


### 第2節 遺溝と遺物


#### 1 溝

当遺跡からは、1条の溝が確認されたが、出土遺物がなく時期や性格について明らかにすることは困難であった。ここでは、調査結果に基づき溝の規模や形状等を中心に記載する。

#### 第1号溝（第29図）

位置 B1b<sub>7</sub>区からB1b<sub>0</sub>区

規模と形状 B1b<sub>0</sub>区から西へ直線的に延びている。確認された長さ13.85m、上幅4.20～4.95m、下幅2.65～3.25m、深さ0.75～0.95mで、断面「」状に掘り込まれている。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。溝の両端共調査区外に延びている。

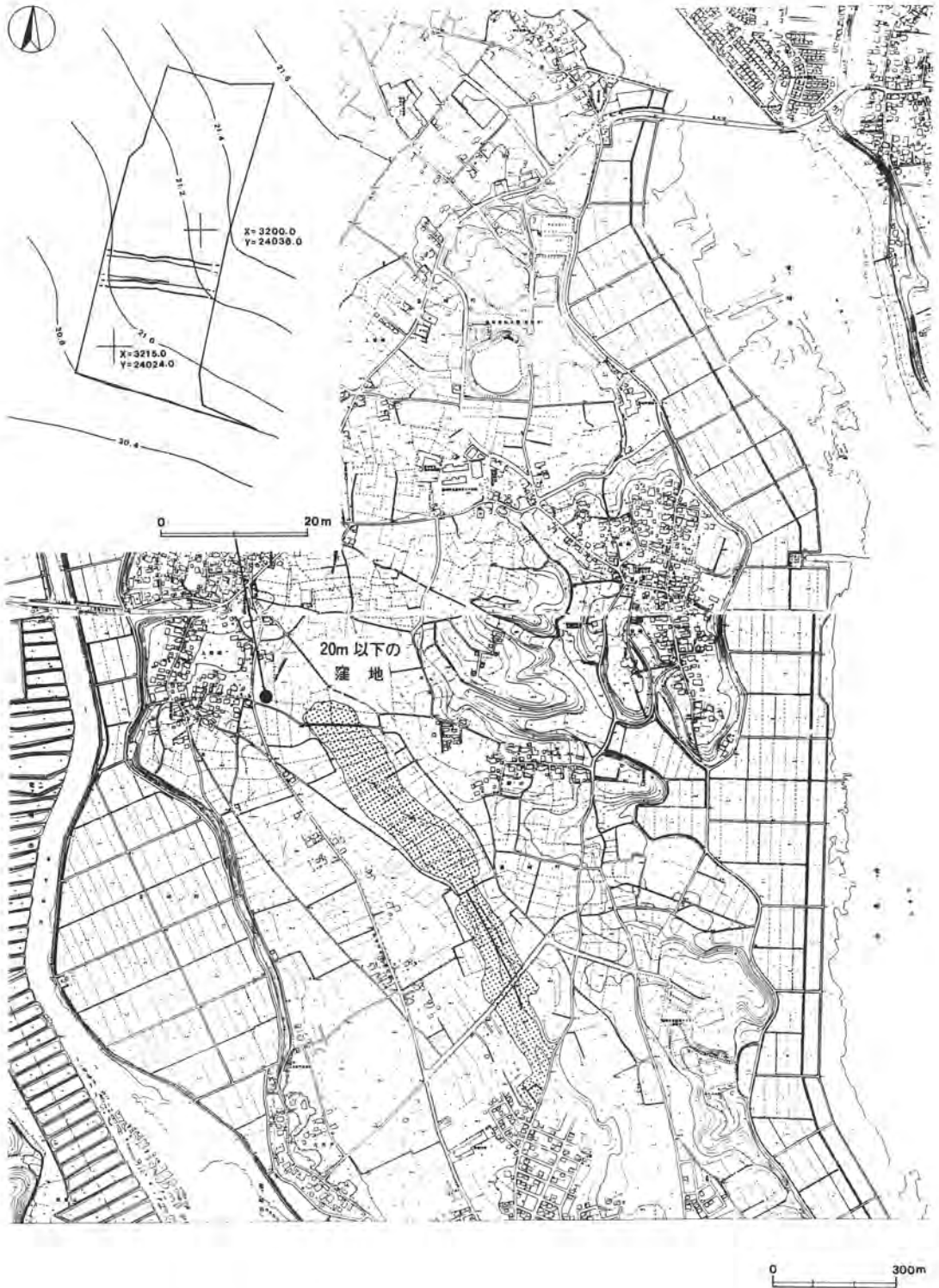
また、南壁下には同時期に掘り込まれた、長さ8.75m、上幅0.23～0.65m、深さ0.08～0.30mで、断面「」状の溝が確認されている。

方向 N-81°-W

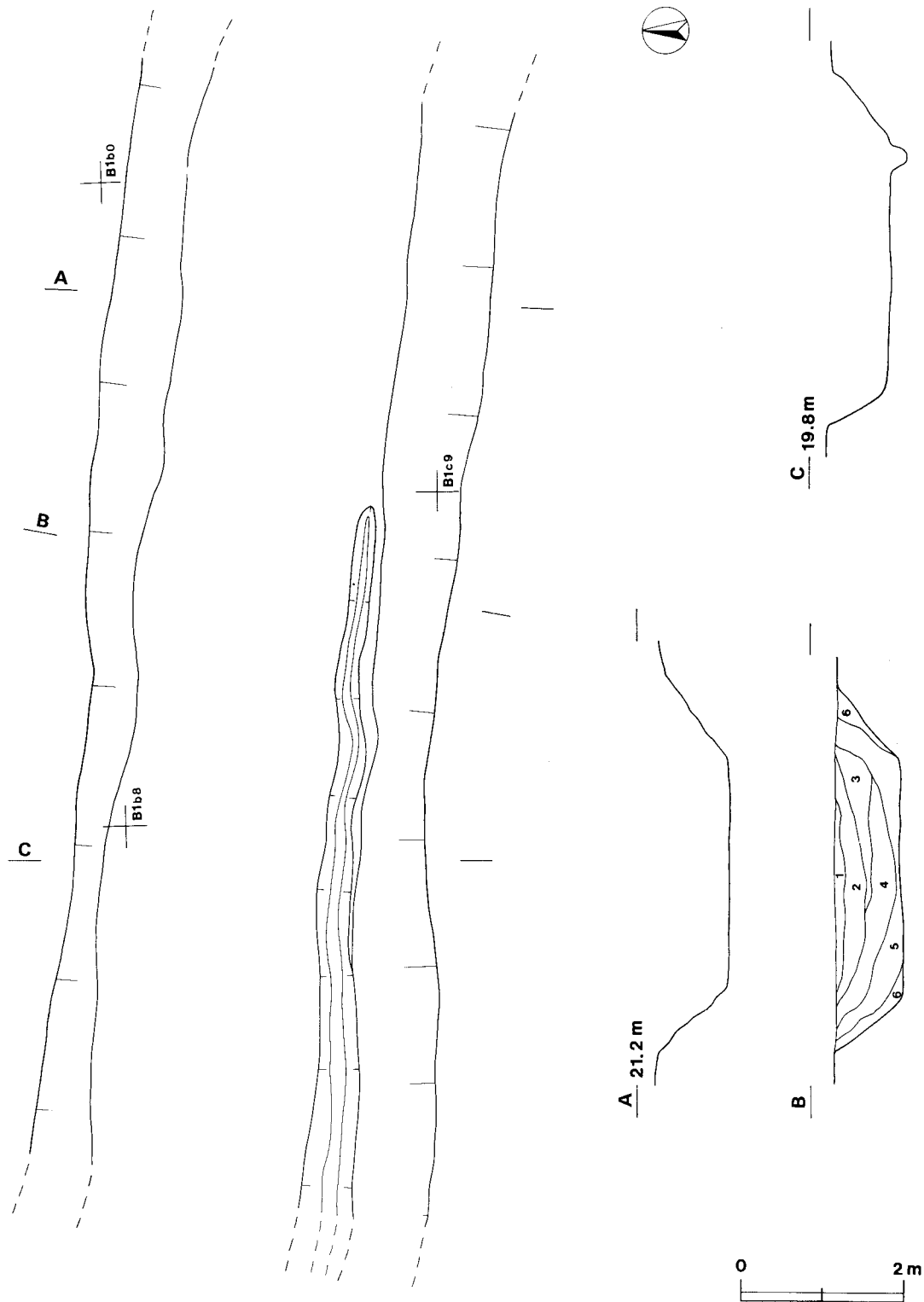
覆土 6層からなる。1層はローム小ブロック少量、黒褐色土を多量に含む暗褐色土、2層はローム小ブロック少量、黒褐色土多量、焼土粒子を極少量含む暗褐色土、3層はローム中ブロック中量、焼土粒子を極少量含む褐色土、4層はローム小ブロック少量、黒褐色土多量、焼土粒子を極少量含む黒褐色土、5層はローム小ブロック少量、黒褐色土を中量含む黒褐色土、6層はローム粒子を中量含む褐色土である。

遺物 流れ込みと思われる縄文式土器片や古銭（永樂通寶）が覆土上層から出土している。

所見 本跡は、遺構に伴う出土遺物もなく、詳細な時期や性格については不明である。



第28図 上岩崎南遺跡地形図



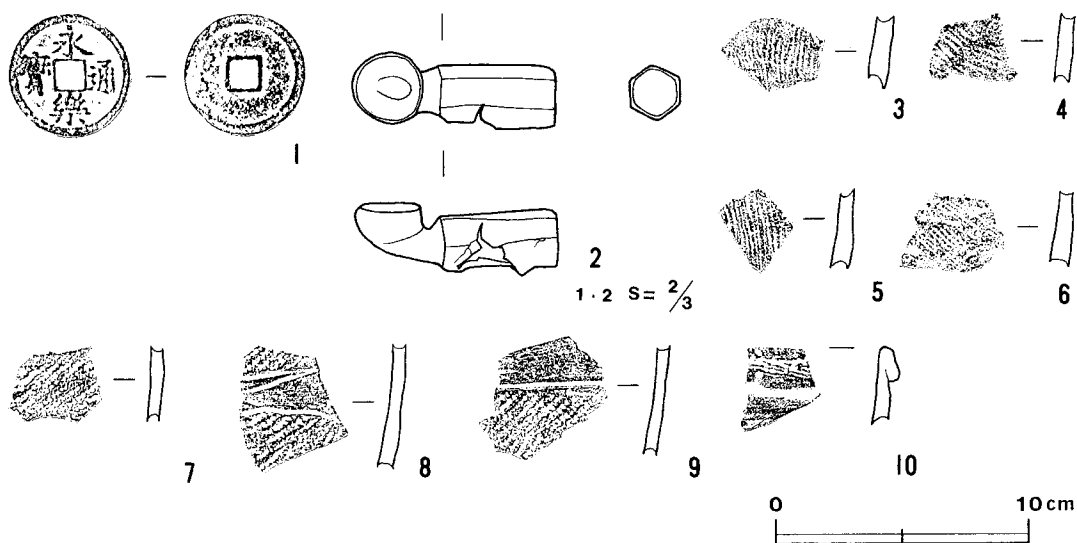
第29图 第1号沟实测图

## 2 遺構外出土遺物

当調査区の遺構外出土遺物について、観察表、実測図及び拓影図でその一部を紹介する。

### 縄文式土器（第30図）

3～6は胴部片であり、それぞれ撚糸文が施されている。早期の撚糸文系の土器に比定される。7～9は胴部片であり、いずれも沈線内に縄文が充填されている。後期加曾利B式土器に比定される。10は口縁部片である。複合口縁で、口縁部には横位の細い沈線の下に無節の縄文が施されている。



第30図 遺構外出土遺物実測・拓影図

### 遺構外出土遺物観察表

図版番号	銭名	初 鑄 年	西 曆	鑄造地名	出 土 地 点	備 考
第30図1	永樂通寶	明 永樂6年	1408	中国	SD-1覆土中	M2


  

図版番号	器 種	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第30図2	煙 管	4.0	1.5	1.3	5.2	SD-1覆土中	M1



### 第3節 まとめ

上岩崎南遺跡の今回の調査によって、調査区の南部をほぼ東西に横切る溝が1条確認されたが、溝の時期や性格について判断できる遺物は出土していない。ここでは、発掘の成果や伝承等を記載し、まとめとしたい。

確認された第1号溝の規模は、上幅4.20～4.95m、下幅2.65～3.25m、深さ0.75～0.95mで、断面「」状に掘り込まれている。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。形状から排水路、堀、あるいは道路の可能性を含めて調査を行った。その結果、硬化面は確認されず、道路の可能性は低いものと判断した。

第1号溝の性格を考えるうえで、関連の可能性のあるものと思われる伝承が、この上岩崎地区に残っている。

幕末期、上岩崎村は旗本上杉氏・阿部氏・窪田氏の相給であり、この上岩崎南遺跡を含む一帯は窪田氏の領地であった。そこには長雨や集中豪雨が来ると、辺り一面沼の様になってしまう窪地（上岩崎南遺跡の東側約100m程離れた「分免窪」と呼ばれる窪地）が存在していた。そこで窪地に溜まった水を排水しようとして、排水路を掘ったということである。窪地の東側にある牛久沼（谷田川）の方へも排水できそうであるが、東側は他領であるため、自領内を通して西谷田川へ排水しなければならなかった。排水先は現在の西谷田川沿いの「中台船着」、<sup>なかだいふなつき</sup>「清水谷船着」<sup>しみずたにふなつき</sup>と呼ばれる2か所のどちらかであったということである。

明治時代の地租改正時に作成された、当時の地籍図（染野氏蔵）には、排水路の記載はみられないが、現在でも「分免窪」と呼ばれる一帯は存在し、台風等の大雨の後は水が溜まり、1m程の深さまでも達するとのことである。

第1号溝の形状から見て、通常水が流れていたものとは考えにくく、普段は空堀として存在し、臨時に使用したものと思われる。また、近世の溝の可能性は高く、地域に残る伝承と考え合わせてみても興味深い。

# 写 真 図 版

日 枝 西 遺 跡

上 岩 崎 南 遺 跡



遺跡全景



調査前全景



遺構確認状況



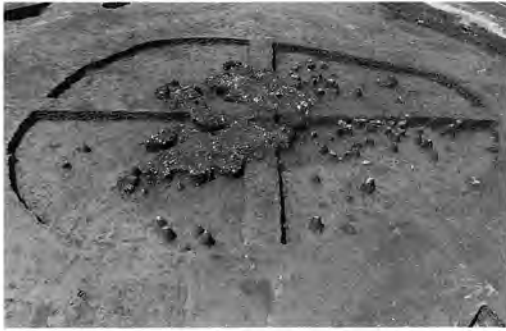
調査終了後全景



第1号住居跡



第1号地点貝塚上層



第1号住居跡・第1号地点貝塚 貝・遺物出土状況



第1号住居跡・第1号地点貝塚 貝・遺物出土状況



第1号住居跡・第1号地点貝塚 土層断面



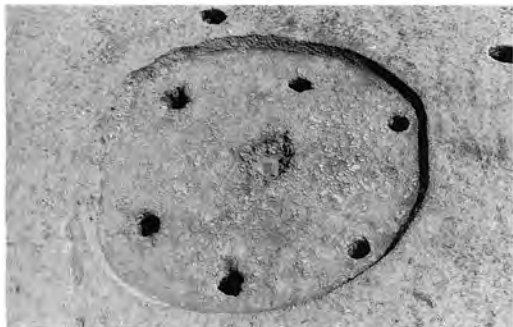
第1号住居跡遺物出土状況



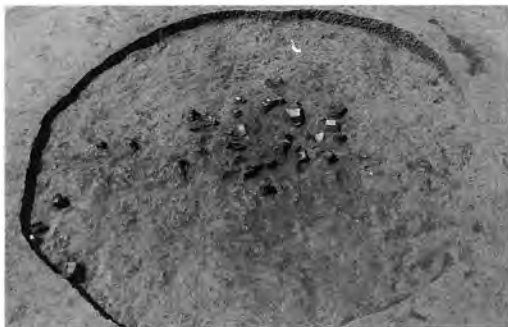
第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



第 2 号住居跡



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 3 号住居跡



第 3 号住居跡遺物出土狀況



第 3 号住居跡遺物出土狀況



第 3 号住居跡遺物出土狀況



第 3 号住居跡遺物出土狀況



第 3 号住居跡遺物出土狀況



第 3 号住居跡遺物出土狀況



第 3 号住居跡遺物出土狀況



第 2 号地点貝塚出土狀況 A



第 2 号地点貝塚出土狀況 B



第1号土坑



第2号土坑



第3・4・5・6号土坑



第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第10・11号土坑



第12号土坑



第14・15号土坑



第16号土坑



第17号土坑



第20号土坑



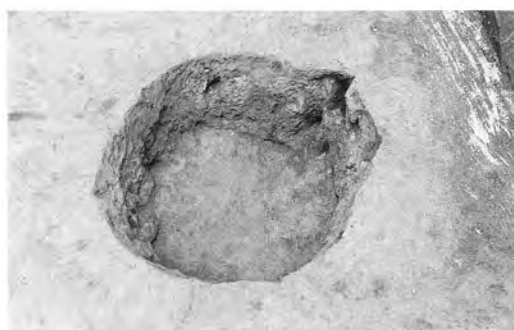
第26号土坑



第27号土坑



第29号土坑



第30号土坑





第34・35号土坑



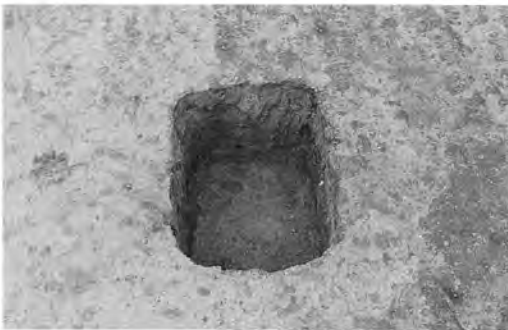
第36・37・38号土坑



第40号土坑



第41・43号土坑



第44号土坑



第45号土坑



第48号土坑



第55号土坑



第1～3号住居跡出土遺物



第3号住居跡出土遺物



14-7



14-8

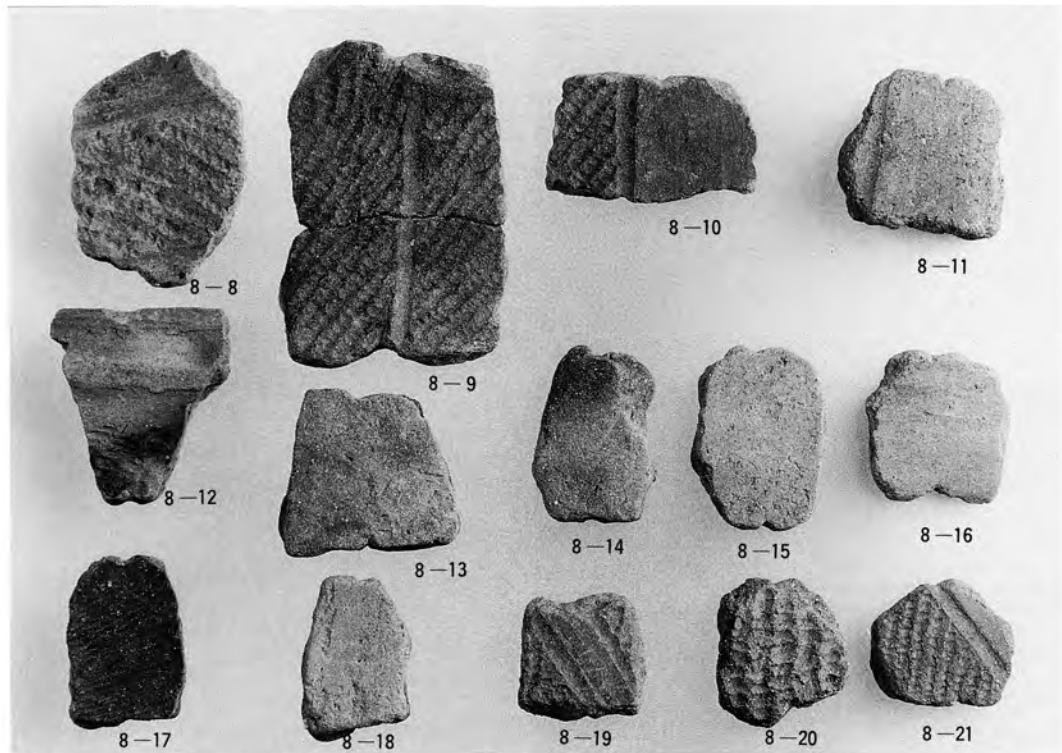


14-9

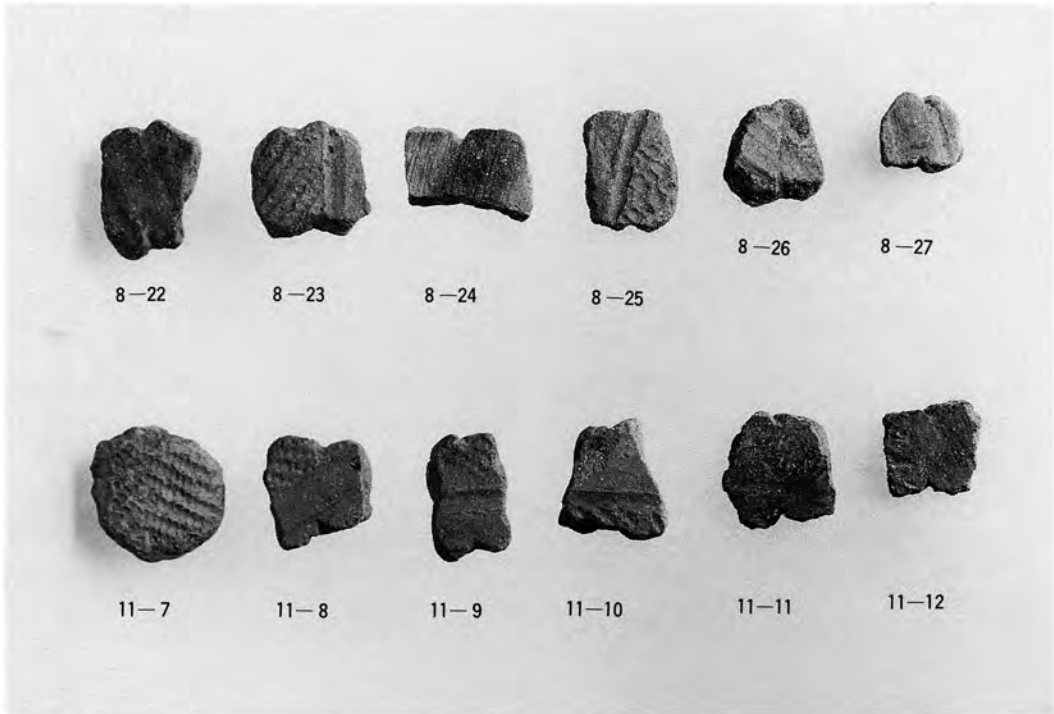


15-17

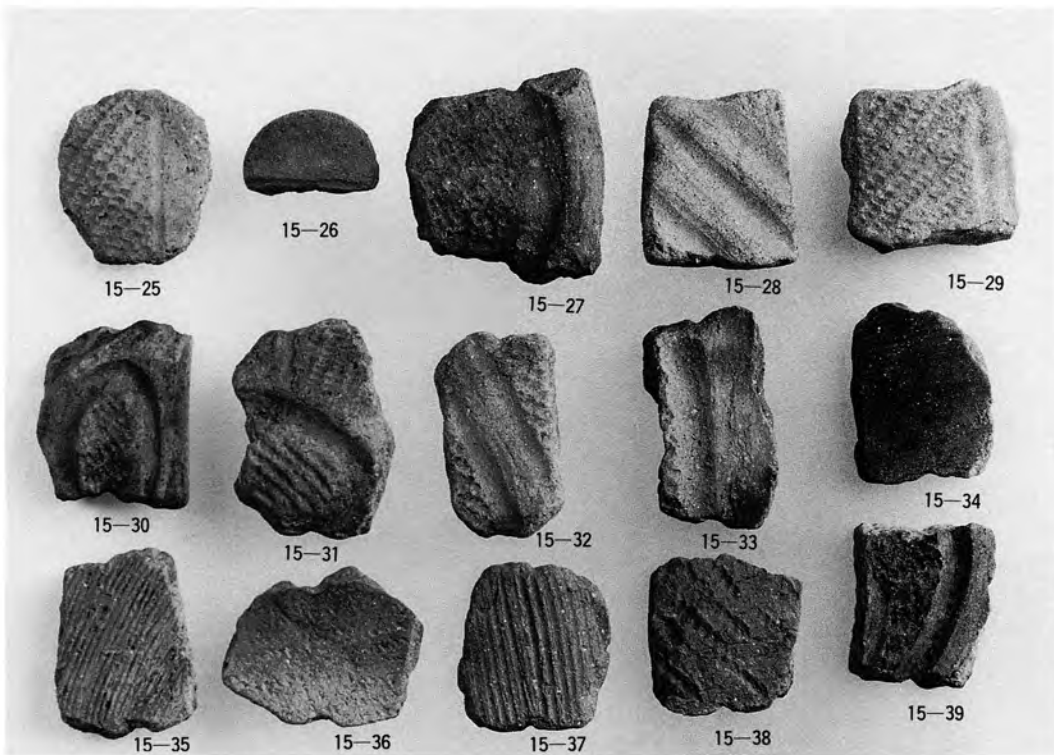
第3号住居跡出土遺物



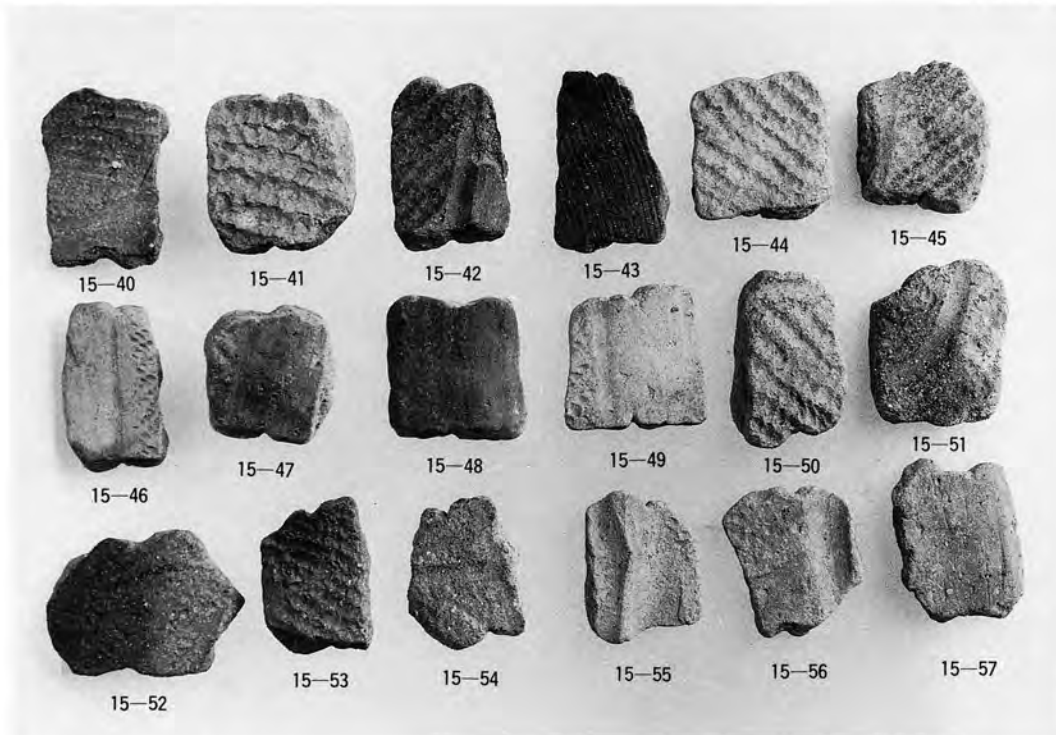
第1号住居跡出土土器片錘



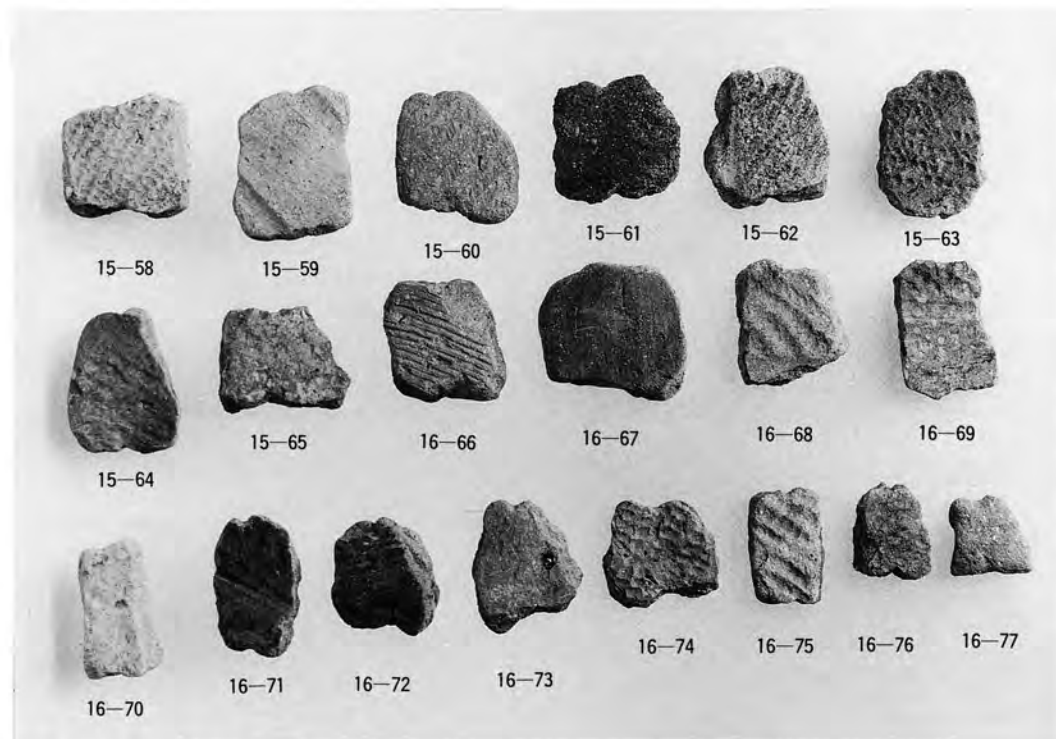
第1・2号住居跡出土土器片錘



第3号住居跡出土土器片錘



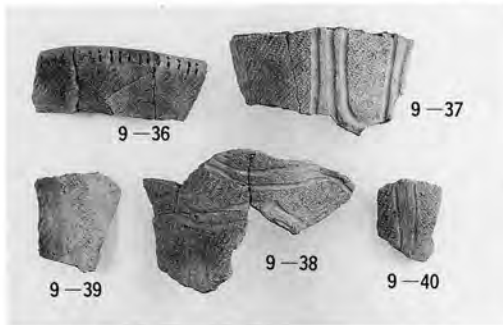
第3号住居跡出土土器片錘



第3号住居跡出土土器片錘



第1号住居跡出土縄文式土器片



第1号住居跡出土縄文式土器片



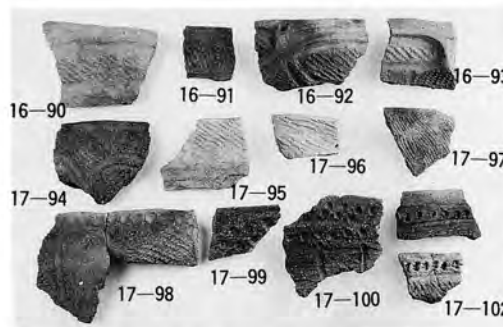
第1号住居跡出土縄文式土器片



第2号住居跡出土縄文式土器片



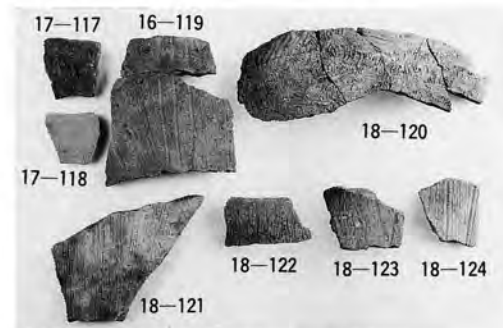
第3号住居跡出土縄文式土器片



第3号住居跡出土縄文式土器片



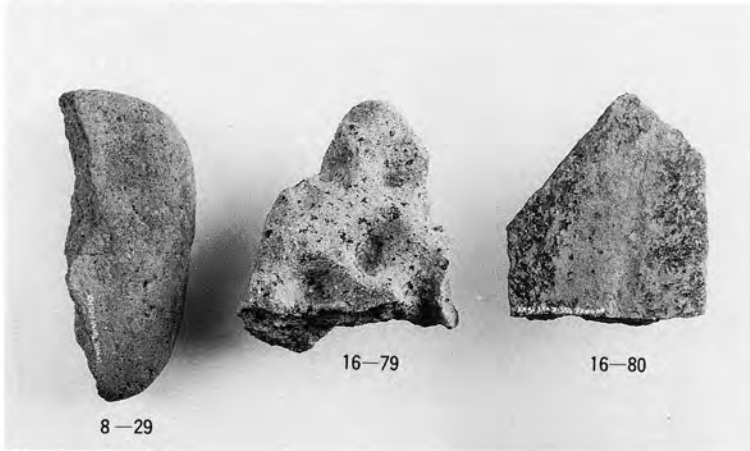
第3号住居跡出土縄文式土器片



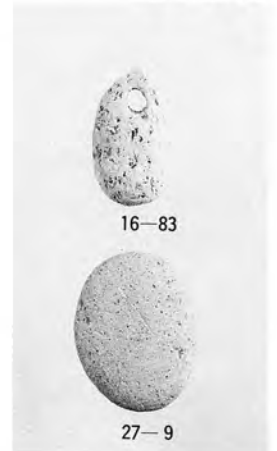
第3号住居跡出土縄文式土器片



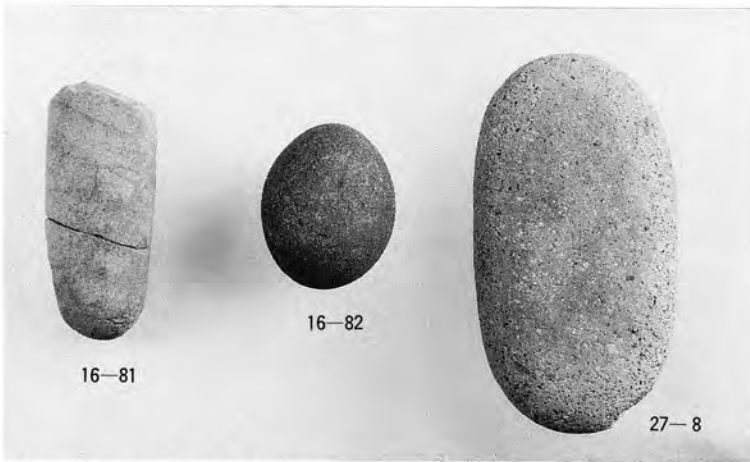
第3号住居跡出土縄文式土器片



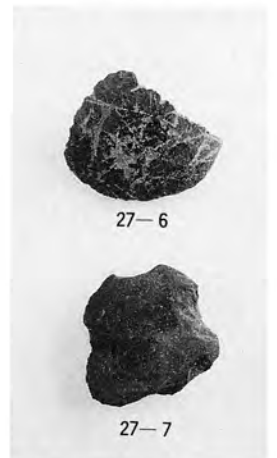
第1・3号住居跡出土石器



第3号住居跡・遺構外出土石器・石製品



第3号住居跡・遺構外出土石器



遺構外出土石器



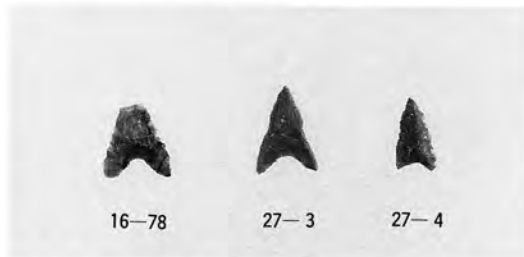
第2号住居跡出土土製品



遺構外出土土製品



第1号住居跡・遺構外出土石器



第3号住居跡・遺構外出土石器





遺跡全景



調査前全景



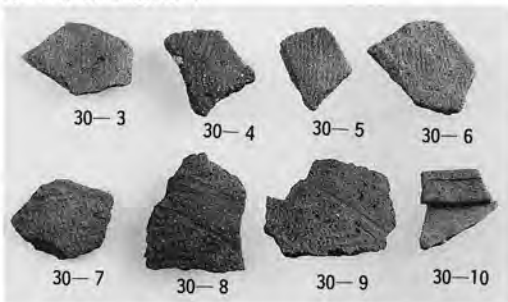
グリッド試掘



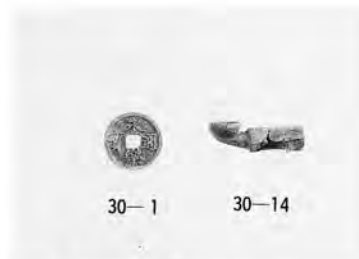
第1号溝土層断面



第1号溝



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第90集

一般県道谷田部藤代線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

日枝西遺跡

上岩崎南遺跡

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市見和1丁目356番地の2  
☎ 0292 - 25 - 6587

印刷 有限会社 ミツギ印刷社  
水戸市河和田町4433-33  
☎ 0292 - 52 - 8481

